慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	史記評林諸版本志稿
Sub Title	
Author	山城, 喜憲(Yamashiro, Yoshiharu)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	1983
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.20 (1983.) ,p.345- 392
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-00000020-0345

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

史記評林諸版本志稿

山城喜憲

はじめに

明代中葉以降、殊に万暦年間に入ると、文章の妙処佳処に圏点旁抹眉批を附し、更には前輩の論評注釈を彙輯標記した評注本が、陸続と刊行され流布している。かかる学風は経史子集四部の諸書に亘るが、史記について言えば、楊慎の史記題評(注1)を魁とし、その体式に依倣した凌稚隆の史記評林に至って高潮に達した。評林に先行して題評の他に、唐順之の精選批点史記(注2)、茅坤の史記鈔(注3)等が出、後に、鄧以讚の輯評(注4)、陣仁錫の奇鈔(注5)、孫鉱の批評(注6)、葛鼎の彙評(注7)、梅之煥の神駒(注8)、湯賓尹の玉壺氷(注9)、焦竑の綜芬評林(注10)、鄭維嶽の旁訓便読(注11)、王思任等の史記統(注12)等が、明末に及んで簇出した。しかし、多くは、書肆が時好に阿附し、機利を得んが為に粗製した俗書で、評林の驥尾に付す節本・類本であり、批点は概して編者の恣意に随い、幼童初学者の為の啓蒙書ではあっても、一家の言を成した著述では殆ど無い。史記評林は此等通俗諸書に比し、批点の周到さ、輯評の浩範さに於て、又、テキストの精善さに於て卓出し、巍然として明代史記学の高峯を占むる編者である。

王世貞が本書の序文に於て「以棟(稚隆の字)之為史記也、其言則自註釈以至贊騭、其人則自漢以及嘉隆、無所不附載、而時時旁引他子史、以己意撮其勝、而為之宣明、蓋一発簡而瞭然若指掌、又林然若列瓌宝于肆而探之也、自今而後、有能紹明司馬氏之統、而称良史至文者、舍以棟奚択哉」と推賞するのも強ち過褒の言ではない。

凌稚隆、字は以棟、号は磊泉、湖州府烏程を本貫とする。万姓統譜、胡承謀原修李堂等増修清乾隆二三年序刊湖州府志等を検すれば、先は元秘書少監呉興郡侯凌時中(字は德庸)を辿り得、時中の子元秘書監懋翁(字は帯德)、懋翁の曾孫明僉都御史賢(字は彦能、洪武二〇〈一三八七〉年の挙人)、賢の子右僉都御史晏如(字は晏然)、晏如の季子敷(字は達夫)と系繋し、稚隆の祖父震(明成化七〈一四七一〉年生、嘉靖一四〈一五三五〉年歿)は敷の季子で、字は時東、練溪と号し、黔陽県学訓導、後、宝山書院提督に任じ、俊才にして、羣籍を博綜、百家暁析し、古文に通じ、

尤も詩に長じた人物とされる。父約言は、字は季默、藻泉と号し、嘉靖一九（一五四〇）年の挙人、全椒県知、沔陽州知等を歴て南京刑部員外郎に任じ、後年、曾孫義渠（字は駿甫）の殉節により資政大夫刑部尚書を追贈されている。編著書に史記評抄（又名、史記概）、鳳笙閣簡抄がある。稚隆は約言の季子で、廸知、述知、遇知、遂知の四兄がある。長兄廸知は、字は稚哲、繹泉と号し、嘉靖三五（一五五六）年の進士で、初め工部員外郎に任じ、後、常州府知に至っている。史漢評林、増定史纂（以上乾隆二三年序刊湖州府志に拠る。）、太史華句、両漢雋言、左国腴詞、名世類苑、万世統譜、文選錦字、名公翰藻、文林綺繡の編著がある。

稚隆はこれら烏程凌氏の華冑として生まれ、「天資俊爽、学問弘博」（清乾隆二〇年序刊烏程県志巻九人物志例貢）と称されたが、不幸、郷試に応ずるも不第に終った。父約言は「士之明経起家者、従郷薦始抱経、以試而望其得薦者、士之情也、試者之心与試者父母之心、其情均也。試事竣、而謂父母之心不深望者、豈其情乎。望既払、而謂父母之心能釈然者、又豈其情乎。通塞在天、伸屈有命、父亦雅能安之、而母之心未知其如父否也。試者之心未知其如父乎、如母乎否也。亦未知其知父之或安於母、母之或不安于父否也。人言稚隆巻已入選、失其巻之三、而不果薦。信有之命也。只消不慍如其父耳。焉知終不得薦、無因以慰母乎」（鳳笙閣簡抄巻四示季男稚隆）と父親として切情を伝え、鎩羽の子を慰諭し感奮を促がすが如くである。稚隆は南試を厭い順天試に応じんとしたようである。これを約言は「聞汝厭心于南、欲改北以求試。是猶趙見逐、而復走韓魏者也。倘不遇而奪釜鬲于塗、又将誰往乎。張舌尚在、和璧誠真。計其常理、似可収捷于南闈。不必舎而之他也。」（同、尚、出入があるが、盛明七子尺牘註解巻五に節略文収載）と訓誡している。しかしながら稚隆は遂に郷試に中らず、例貢に甘んじた。「絶無他嗜、独愛典籍雌黄鉛槧、未嘗一日去手」（清乾隆二三年序刊湖州府志巻二〇人物三）と評さるるを鑑れば挙業にはむしろ消極的であったようでもある。彼が後世聊か名を留むるに至ったのは史漢左伝等の諸儒評説を蒐羅編纂したことに於てである。史記評林一三〇巻・史記纂二四巻（或は一二巻）・漢書評林一〇〇巻・漢書纂六七巻・春秋左伝評注測義七〇巻（或は三〇巻）・五車韻瑞一六〇巻を遺している。四庫提要は春秋左伝評注測義七〇巻及び五車韻瑞一六〇巻をのみ存目に留め、他は無視し、存目に著録されたる二書も「穴砕不足観」、「名為広所未備、而舛謬弥滋、且往往杜撰」と酷評を下している如く、必ずしも後代評価を得ているものではない。しかしながら、史記評林に限ってみれば中国本国に於てよりも寧ろ日本に於て、江戸時代を通じ再三板行が重ねられ、弁疑書目巻之上略名書目に「史記評林ヲ史記ト云」とある如く、史記といえば史記評林を意味した程に弘通流行しており、我国近世の学術文化に及ぼした影響は甚大なものがある。

徐中行の史記評林序（351頁参照）に「凌氏以史学顕著。自季默有概矣。加以伯子稚哲所録。殊致而未同帰。以棟按其義以成先志」と見ゆる如く、凌氏の家学は史学とされ、稚隆が遺した功業は其の学を継承するものである。自序（350頁参照）に拠れば、父約言の史記抄、伯兄廸知等の輯録せる諸名家批評、張之

象所纂の史記発微に鑑み、自らも笈を負い、識者史家を捜訪しつつ得た諸論評を彙纂して、本書は成った。上梓に当っては、古歙の汪氏、維揚の張氏の助成を得、万暦二（一五七四）年に著手し、同四（一五七六）年に刊成、「編摩歳月形労神悴、聊以償疇昔之志」と述懐する。

史記評林の文献学的研究には、水沢利忠博士の史記之文献学的研究第五章第二節(四)に該洽なる論攷があり、字句の出入異同を精査することによりテキストの系統を探り、諸注釈の体例内容を分析し、諸板本に就いて体裁性格を述べ、文字の異同を校勘して各本の連絡を見極めた高論である。

本稿は管見に入れる史記評林諸本の形態上の異同、及び各本間の系絡を明らかにすることを主眼とした解題目録であり、各本について特に刊・印・修の甄別に意を用い、知見諸儲蔵本の特徴並に所在を畢記しておいた。些少なりとも水沢論文を補足し得れば至幸に思う。調査に当っては博捜を宗としたが、何分見存本の数は、取り分け和刻本に於て夥しく、そのすべてに調査を及ぼすことは早急には不可能であり、主要なる儲蔵機関所蔵本に限らざるを得なかった。爾後、追而拾補していく所存である。

史記評林目録

一　知見の版本は版種にして次の二一種である。

一　書名は初出の原刊本のみ全記し、以下「同」字で略す。但し、内題を異にする場合（19）、及び冠称を有つ場合（14・17）には全記する。

一　「同」は全て「史記評林」の略で従って15・16・18の内題は「史記評林」である。

一　「又」は同板後修後印本を示す。

一　巻数・著者事項は初出本を除き省略し、前出本と異なる場合にのみ特記した。従って書名欄の「同」は、特記なき場合巻数・著者事項も前出本に同じことを意味する。

一　書名頭に冠した標号は、解題の標号に符合する。

1イ史記評林　一三〇巻補史記一巻首目一巻　漢司馬遷撰　劉宋裴駰集解　唐司馬貞索隠　唐張守節正義　明凌稚隆輯校　明万暦四（一五七六）年刊（呉興凌氏）

1ロ又　附読史総評一巻　修

1ハ又　逓修

1ニ又　逓修

1ホ又　逓修

2イ同　清光緒一〇（一八八四）年刊（湘郷劉氏）　翻明万暦四年呉興凌氏刊逓修本

2ロ又　清光緒一七（一八九一）年修（星沙養翮書斎）

3同　〔明万暦〕刊

4イ同（内題「史記」）　朝鮮〔粛宗頃〕刊

4ロ又　修

○

5イ同　附短長説二巻　明李光縉増補　（附）明王世貞撰　〔明万暦〕刊（建陽　熊体忠・劉朝箴）　覆明万暦四年呉興凌氏刊逓修本

5ロ又　後印（宏遠堂熊氏）

5ハ 又 修
5ニ 又 遯修（種徳堂熊氏）
6イ 同 某氏点 寛永一三（一六三六）年刊（京誓願寺前 八尾助左衛門尉） 覆〔明万暦〕建陽熊体忠等刊種徳堂熊氏修本〈八尾版初刻本〉
6ロ 又 後印（京本能寺前 八尾助左衛門尉）
6ハ 又 元文元（一七三六）年修（京 銭屋庄兵衛・林権兵衛）
○
7イ 同 〔中嶋道允〕点 寛文一二（一六七二）年—延宝二（一六七四）年刊（京 八尾甚四郎友春）〈八尾版再刻本〉
7ロ 又 修
7ハ 又 遯修
8イ 同 天明六（一七八六）年刊（京 八尾甚四郎友春） 覆寛文一二至延宝二年刊本
8ロ 又 寛政四（一七九二）年修（広華堂蔵板 大坂 松村九兵衛・森田伝兵衛・高橋平助）
8ハ 又 後印（大坂 松村九兵衛・森田伝兵衛・伊藤七郎兵衛）
8ニ 又 後印（大坂 敦賀屋九兵衛等）
8ホ 又 後印（京 山中瑞錦堂丸屋善兵衛）
8ヘ 又 後印（大坂 秋田屋太右衛門等）
8ト 又 後印（大阪 堺屋新兵衛等）
8チ 又 後印（大阪 河内屋茂兵衛等）
9イ 同 明治一三（一八八〇）年四月刊（大阪 松邨九兵衛等） 覆天明六年京八尾甚四郎友春刊本〈八尾版三刻本〉
9ロ 又 同九月印（同）
10イ 同 奥田遵校 明治一二（一八七九）—一五（一八八二）年刊（東京 万青堂別所平七） 覆天明六年京八尾甚四郎友春刊本
10ロ 又 明治二五（一八九二）年印（修文館）
○
11イ 同 寛文一三（一六七三）年刊（京 積徳堂）〈紅屋版初刻本〉
11ロ 又 後印
12イ 同 明和七（一七七〇）年刊（京 世裕堂） 覆寛文一三年積徳堂刊本〈紅屋版再刻本〉
12ロ 又 天明九（一七八九）年印（大坂 柳原喜兵衛・松村九兵衛・梅月市兵衛）
12ハ 又 後印（大阪 河内屋喜兵衛等）
12ニ 又 明治印（大坂 敦賀屋九兵衛等）
○
13イ 同 田中篤実等校 明治二（一八六九）年刊（鶴牧修来館蔵版 東京玉山堂山城屋佐兵衛発行）
13ロ 又 後印（同）序文改修
13ハ 又 後印（修来館水野忠順蔵版 東京山城屋稲田佐兵衛発行）
14 校訂史記評林 一三〇巻校訂史記評林補（三皇本紀）一巻首目二巻 藤沢南岳校点 明治一四（一八八一）年刊 大阪 浪華同盟書楼岡島真七等）

15 同　大郷穆・伊地知〔恒庵〕（貞馨）点　明治一四（一八八一）年刊（大阪　修道館）　鉛印

16 同　鈴木義宗点　明治一四（一八八一）年刊（東京印刷会社）　鉛印

17イ補標 史記評林　有井進斎（範平）補標　明治一六（一八八三）―一八（一八八五）年刊（東京　報告社）　鉛印

17ロ 又　明治一九（一八八六）年印（東京　九春堂）

18 同　明帰有光評点　清方苞増評　石川鴻斎等輯校　明治一五（一八八二）・一六（一八八三）年刊（東京　鳳文館）

19 同　原存列伝七〇巻（外題評林史記列伝）明治二六（一八九三）年六―一〇月刊（東京　同盟出版書房）　鉛印　訓点付　B6一〇冊

20 同　原存巻六一―一三〇（外題史記列伝）　重野安繹校注　明治四四（一九一一）年刊（東京　富山房）　菊二冊　漢文大系所収

○

21 百五十名家評註史記（即史記評林）　民国一二（一九二三）年刊（上海　文瑞楼）　石印

解題

一　前に標出各本の一般事項を述べ、後に各所儲蔵本について特殊事項を記す。但し、知見現存本が僅少且つ書誌記述を直ちには一般化出来難い場合はその限りでなく、冒頭より所蔵者を掲出し、該儲蔵本について記述する。

一　各所儲蔵本は、原則として早印本より後印本へと排列記述することに努めたが、実物対照が困難で先後の判別が付き難い場合が多く、必ずしも厳格ではない。

一　冊数下の（　）内は、所蔵者の函架番号を示す。

○凌稚隆原輯本

1イ明万暦四（一五七六）年呉興凌氏原刊本

〈国立国会図書館蔵〉　四〇冊合二二冊（176 24）

白棉紙印本。香色表紙（二八・六×一九・六糎）、右肩に目録外題を墨書。首に「刻史記評林序」（「万暦四年丙子冬十二月朔帰安茅坤書」）、唐司馬貞の「史記索隠序」「史記索隠後序」並に「補史記序」、唐張守節の「史記正義序」、劉宋裴駰の「史記集解叙」、張守節の「史記正義論例」「史記正義謚法解」並に「史記正義列国分野」、三皇五帝・夏・商・周・秦・漢譜系図計三葉、五帝・夏・商・周・秦六国・漢国都地理図計三葉、「史記評林凡例」十八則（末に二格下げて凌氏自序があり、尾に「呉興後学凌稚隆識」と署す）、「史記評林姓氏」、「史記評林引用書目」を列載し、次に「補史記」（首は「補史記（隔一格）呉興凌稚隆輯校」、第二行低一格「三皇本紀唐司馬貞補並註」と題す）並に「史記評林目録」（第二至五行に一格を低し「漢　太　史　令　龍　門　司馬遷　著／宋　中　郎　外　兵　曹　参　軍　裴駰集解／唐朝散大夫国子博士弘文館学士河内司馬貞索隠／唐諸王侍読宣議郎守右清道率府長史張守節正義」と題す）が有る。本文巻頭「史記評林巻之一（隔六格）呉興凌稚隆輯校」、次行一格低げて「五帝本紀第一」と題す。左右双辺（二四・三×一三・九

糎、高さ四・一糎の上層を含む)。有界十行、行十九字、注小字双行、行十九字、各巻首尾の諸家評論低三格小字双行。上層標注行七字、凌氏按語低一格行六字。正文には句点声点及び傍注附刻。版心白口単黒魚尾、上象鼻に「史記巻幾」、中縫に小題及び丁付、下象鼻に刻工名、各巻首葉には屢屢「長洲顧櫰写同邑沈玄易刊」(巻一首葉)等と鈔手名あり。刻工鈔手名は次の如し(単字は略す)。刻工:王白才　王以徳　付汝光　汝光　世清　余六　余世芳　余芳　余希　余陳　何文甫　何仲仁　仲仁　何仲　何祥　呉文泮　文泮　沈玄易　沈如昇　沈龍　汝修　仲大　林文　林志　林汝昂　洪平　倪世荣　世荣　孫余　孫承　愛　孫洪　孫徐　孫葉　孫陶　唐文　徐二　徐子　徐文台　文台　徐光祖　徐軒　徐朝　袁宏　袁敏孝(学)　袁孝　張鳳　張璈　章右之　章国華　章華　章樊之　陳子文　子文　陳云　陶仲　陶英　陶傑　陸本　傅機(付机)　彭天恩　温志　楊三　楊元　楊順之　葉三　趙応其　趙其　劉(刘)子春　劉文　劉守礼　劉守　劉礼　鄭玄　鄧秦　鄧欽　鄧漢　盧琢王　銭世英　銭英　戴文　戴徐　謝安　厳春　顧本仁　本仁　顧成　顧修、鈔手:顧櫰　銭世傑　徐普　金応奎　高洪

凡例に「太史公史記批評、古今已刻者、惟倪文節史漢異同、楊升庵史記題評、唐荊川史記批選、柯希斎史記考要、其抄録流伝者、何燕泉、王槐野、董濤陽、茅鹿門数家、若楊鉄崖、王守溪、陳石亭、茅見滄、田豫陽、帰震川数十家則又蒐羅而出之、悉選録入」と輯録せる諸家評説の主たるものを明示し、また「史記刻本、自宋元迄今不下数十家。但近時見行者、杭本無索隠述讃、白鹿本無正義、陝西本欠封禅・河渠・平準三書。惟金台汪本蒲田柯氏所校、頗少差謬。茲刻以宋本与汪本、字字詳対、間有不合者、又以他善本参之、反覆讐校。庶免亥豕魚魯之弊云」と拠れるところの底本が示さる。更に凡例末の凌氏自序に「隆自弱冠読先大夫史記抄、旦且夕焉而悵其未備也。嘗博蒐羣籍、凡発明馬史者、輒標識於別額、積草青箱非一日矣。乃伯兄稚哲、友人金子魯来自国門、獲所録諸名家批評総総焉。私竊艶之、而雲間張玄超、持所纂発微者、造余廬而印証也。已復負笈大方、益羅史家所珎秘者、彙之而裒然成帙矣。則為嗜古者、相仮貸無寧居焉。古歙汪氏、維揚張氏、咸称好事、遂各捐貲付梓。肇於万暦甲戌、訖於今丙子冬(中略)金子魯名学曾、張玄超名之象、先大夫諱約言、伯兄名廸知。併書以志本始云」と成書刊行にいたる経緯が記されている。

本帙は字画明晰なる早印本ではあるが、「史記研究的資料和論文索引」(中国科学院歴史研究所第一・二所編、北京　科学出版社　一九五七)所載の北京図書館蔵原版初印本巻三首葉の書影と比べると、同版ながら、書影の版心下象鼻に見える「古呉銭世傑写刊」なる鈔手名がない。或は本帙は補修本と見做すべきか。窺管の限りではあるが、比較検討し得る初印本は本邦には現存しないようである。国外儲蔵本では台北の国立中央図書館(四部)、故宮博物院(三部)、北京図書館蔵本(巻七四―一〇四、配別本、管延芬跋並臨銭泰吉校跋)等が同版本と思われるが、次に述べる如き修本或は遞修本も含まれていよう。

1ロ修本　附読史総評一巻

〈内閣文庫蔵〉 四〇冊（279 23） 高野山釈迦文院本

白棉紙印本。薄茶色表紙（三〇・三×一八・三糎）。首序、「史記評林叙」（「呉郡王世／貞撰」）、「史記評林序」（「万暦五年歳丁丑八月之吉／賜進士出身中奉大夫江西布政使司右／布政使天目徐中行撰」）の二序並に「読史総評」を新増し、王敍を首に、徐序は茅坤「刻史記評林序」の次に、「読史総評」は引用書目と「補史記」との間に配す。「読史総評」は宋鄭樵以下明王世貞に至る二十四家の史記全般に係る評論を蒐める。他の部分に比べやや撫印明晰の感があり、発刊後暫時の間に新たに成編増補されたものと思われる。

本書は刊行後漸次一部増補改訂されたようで、本帙に於ても次の如き入木改修の跡が認められる。「史記評林姓氏」第一葉裏第九行「劉知幾字子玄彭城人」を「林之奇字小穎侯官人」に、第二葉表第八行呂祖謙下の「寿州人」を「金華人」に、同裏第二行洪邁下の「金華人」を「鄱陽人」に、第六行の「呉鼎」を「黄履翁字吉父三山人」に、第七行下段の空格の所に「林　駉字徳頌人」と、第三葉表第二行の王褘下の「莆田人」を「義烏人」に、第五行の楊士奇下の「字以行」を「以字行」に、第九行の謝鐸下の「余姚人」を「太平人」に、第四葉表第八行の「高　岱字伯宗京山人」を「薛應旂字仲常武進人」に、第九行の「尤　瑛字汝白無錫人」を「王世貞字元美太倉人」に、第五葉表首行の「陸瑞家字信卿蘭谿人」を剜去し二行に亘り「呉　鼎字　錢塘人　尤　瑛字汝白無錫人／高　岱字伯宗京山人」と改め、もと第二・三行にあった「以上諸名家字里無考者闕猶有不及載姓氏／者以所評僅得一二節故不敢槩録于此云」の二行が第五・六行に移刻されている。また巻二第一葉表上層標注の「按三王紀云云」及び「按丹鉛摠録云云」の二文を削去し「黄震曰云云」の八行を新たに増入し、その後に原刻の「按三王紀云云」の二行を移刻、巻三第一葉表標注「楊慎曰云云」前の余白に「黄震曰云云」の十二行を増補、巻七第一葉表標注「葛洪曰云云」の三行及び「楊慎曰云云」の二行計五行を削り、新たに「黄震曰云云」計六行を刻し、「楊慎曰云云」の二行は「唐順之曰云云」後の余白に移刻、巻一〇五第一一葉裏標注原刻に「按凡諸也字多／百似衍者」を「董份曰（以下同文）」と改め、巻一一〇第一葉表茅坤標注内の「処」「与」二字が「處」「與」の正字体に改められている。

尚、前掲国会図書館蔵本には、巻一一〇第一葉版心下象鼻に「戴」字がみえるが、本帙同個所には無く、刻工名が少しく欠落している。

1ハ 遞修本

〈東京都立中央図書館蔵〉 三六冊（特 6602）

白棉紙印本。空押行成紋香色朝鮮表紙（二七・九×一八・三糎）、外題は「史記評林幾」、目録外題があり共に韓人墨筆。序目次第は前掲内閣文庫蔵本に同じ。

本遞修本には更に次の如き増補訂正の跡が認められる。

首の譜系図の漢世系図後に呉・斉・魯・燕・蔡・曹・陳・杞・衛・宋・晋・楚・越・鄭・趙・魏・韓・田斉の諸世家譜系図十八図九葉を増補し、次の地理図と合せて丁付を一至十五とする（前掲早出印本は一至六）。また史記評林姓氏第一葉表第

二・三行原刻「魏／陸　機字士衡吳興人」とあったのを「晋／葛　洪字容父東陽人」とし第六行下段（南北朝の項）の「鮑　彪」を削去し、第二葉表第一行下段（宋の項）の葛洪を削去してその所に「鮑　彪　縉雲人」と刻入訂正されている。第一葉裏第三行（唐の項）「孫　樵」を削除し「劉知幾字子玄彭城人」とし、第二葉表第三行下段の「鄭　玉」を削除、第六行上段舒雅下「廬陵人」を「廬州人」と改め、第八行下段呉師道下に「東陽人」と補訂し、第三葉表第一〇行下段邵宝下の「字君賢」を「字国賢」と訂正、同裏第四行上段李夢陽下「開封人」を「慶陽人」とし、第一〇行下段胡纘宗下「字学思」を「字孝思」と訂正、第四葉表第七行下段林希元下「字茂貞」を「字茂貞」とし、同裏第六行下段汪道崑下「字玉卿」を「字伯玉」と改める等の補訂がなされ、また、読史総評の黄履翁と馬子才との間に曾鞏・范祖禹・王応麟・馬端臨・劉因、黄佐と王維楨の間に王褘・何喬新の計七家の評文が新増され、末の王世貞の評説の後に「又曰」二条が増補され、計十八丁で三葉を増している。

1ニ 遞修本

〈尊経閣文庫蔵〉　欠巻二五―二七、九一―九八　三七冊（原四〇冊、第一二・三〇・三一冊を欠く）

白棉紙印本。後補濃縹色表紙（二六・九×一七糎）、書名のみを刷印せる双辺の刷題簽があるが原題簽ではあるまい。首目の順序次第は「補史記」を目録の次、巻一直前に配するほかは前掲内閣文庫本に同じ。

更に次の如き増補がなされている。

「史記評林姓氏」末葉第二行下段より四行にかけて「葉盛字与中崑山人／李攀龍字于鱗済南人　陳文燭字伯玉沔陽人／劉　鳳字子威長洲人」の四名を追刻し、「読史総評」末の王世貞評文の次に陳文燭の評二文が加えられている。

ほぼ全巻に亘り、正文及び三注には朱句点朱引、墨筆（まれに朱筆を交える）の返点縦点送り仮名の書入がみられ、欄上及び欄脚には墨筆で校合等の書入がなされ、朱の標注がある。上層余白或は附箋に後述の李光縉増補本より李氏増評が移写され、凡例末には李氏題識が、「読史総評」末には盧舜治の評文、さらに「短長説」二巻が補写されている。

巻末に次の貞享元（一六八四）年林鳳岡の手識がある。

史記合部百三十巻我家／旧点本幸存／加賀羽林菅公曾借之写／訓点朱句其後使我見之／数遍校正与家本不差一／字豈料我家青氈為／大家之珍物即書一語以／遺後証也／貞享甲子孟夏　整宇林戇識／（印）（印）〈印文「林氏／戇?」「勅／民」〉

「金沢学校」（朱長方）、「学」（朱円）の印記あり。

1ホ 遞修本

〈東京大学東洋文化研究所蔵〉　巻五―七、一五―一八、二五―三六、七二、七四―七八、九七、一〇一配〔明万暦〕刊李光縉増補本　巻七三配鈔　六四冊（史・正史・73）

茶色表紙（二六・九×一七糎）。序次、首に徐仲行序を冠し、王世貞叙は茅坤序の次に、補史記を正義序、集解敍の間に、正義謚法解を引用書目と読史総評の間に配する等少しく順次の乱

れがある。

原刻葉の漫漶が進み、甚しい個処は覆刻による補刻がなされ（巻一〇〇第六葉、巻一二〇第九葉等）、巻一〇〇、一〇二―一一〇、一一三―一二〇の巻頭大題下の「呉興凌稚隆輯校」の七字を失刻或は削除する等の粗漏が目に付く。「青田／徐則／恂蔵」（白方）、「投戈／講藝／息馬／論道」（白方）、「沢／閩」（朱方）、「如／峩?」（朱方）の印記あり。

2イ 清光緒一〇（一八八四）年湘郷劉氏刊本

〈国立国会図書館蔵〉 四〇冊（222.03-R74S）

淡茶色表紙（二四・三×一五・七糎）、外題無し。書扉に「光緒甲申重刊／史記評林／ 佩蘭堂蔵板」と題され、その裏に「湘郷瑞芸氏劉鴻年校於／耕雲読月之室 男伝璠 姪伝琛 伝珮 同校」と双行木記がある。首目は首二冊に亘り、王世貞敘より国都地理図までを第一冊、以下「史記評林目録」までを第二冊に収め、順序次第は「史記評林凡例」を「史記評林引用書目」の次、「読史総評」の前に配することのほかは上掲内閣文庫蔵本に同じ。本文巻頭「史記評林巻之一（隔七格）呉興凌稚隆輯校」、第二行低一格「五帝本紀第一」と題す。尾題は大概「史記評林巻之幾終」、或は「終」字を左寄りに（巻六六等）、或は大字（巻一七等）に刻し、時に字無き巻（巻六二等）もある。四周双辺（一六・二×一〇・六糎、高さ三・五糎の上層を含む）、有界、十行、行廿一字、注小字双行行廿一字、上層標注行六字、凌氏按語低一格行五字。正文には句点声点旁注の附刻あるも誤脱を免れず。版心白口双黒魚尾、「史記巻幾（小題）（丁付）」。

本版は原刻増修本の翻刻本であり、首の譜系図・「史記評林姓氏」・「読史総評」並に眉上標注は修本の増補改訂に従っている。中国本土では明末から清代を通して史記評林が覆刻あるいは翻刻されたことは殆ど無く、管見の限り、清末刊行の本版がその嚆矢である。後述する如く、江戸時代前期より明治にかけしばしば重刻され通行した日本の実状と較べ、本書の受容の相違が歴然としていて興味を引く。（追記1）

2ロ 清光緒一七（一八九一）年星沙養翮書斎修本

〈東北大学附属図書館蔵〉 三二冊（狩3 5962 32） 狩野文庫

薄茶色表紙（二一・三×一三・九糎）、外題無し。書名のみを題せる書扉があり、その裏に「光緒辛卯秋仲星／沙養翮書斎重刊」なる単辺両行木記がある、首目は王世貞・徐中行・茅坤の原三序を冠し、次に「史記正義序」・「史記索隠序」・同後序・「補史記序」・「史記評林目録」・〔読史総評〕（首四葉を欠く）・「史記集解叙」・「史記正義論例」・「補史記」と続き、以上を首冊となす。前記湘郷劉氏佩蘭堂蔵板本（2イ）に比し、「史記正義諡法解」・同列国分野・譜系図・地理図・「史記評林姓氏」・同引用書目・凡例を欠く。首の王世貞叙首葉に茅坤序首葉を、茅坤序首葉に王世貞叙首葉をそれぞれ誤綴。

本帙は、木記に「光緒辛卯（一七年）秋仲星沙養翮書斎重刊」とあるが、前記清光緒一〇年湘郷劉氏刊本とは明らかに同版で、茅坤序首一葉等一部覆刻補修葉を混える修本である。「尹基?／周印」（白方）の印記あり。（追記2）

3〔明万暦〕刊本

〈内閣文庫蔵〉 三一冊（史84） 紅葉山文庫本

新補茶色表紙（二六・九×一五・七糎）、書題簽「史記評林幾」。第二七冊（巻一〇九―一一二）を除き裏打補修がなさる。序目は、王世貞叙、茅坤序、徐中行序（以上三序は前掲原刻修本の覆刻）、「史記集解序」、「史記索隠序」、「史記索隠後序」、「補史記序」、「史記正義序」、「史記評林凡例」、「史記評林引用書目」、「史記評林姓氏」、「史記評林目録」（以上第一冊）、譜系図・国都地理図、「史記正義論例諡法解」（列国分野を含む）、「読史総評」と続き最後に「三皇本紀」（第二行低二格「唐国子博士弘文学士河内司馬貞補撰并註」と題し、「補史記」の大題並に輯校者名の題署なし）を配す（以上第二冊）。本文巻頭「史記評林巻之一」、次行低一格「五帝本紀第一」とのみ題署され、輯校者名は無い。或は小題を上にし下に大題を、「史記幾」又は「史記評林巻之幾」と題する巻も多い。四周双辺（二三・七×一四・二糎、高さ二・五糎の上層を含む）、有界、十一行廿四字、注小字双行行廿四字、上層標注行五字或は四字。正文には句点声点附刻。版心白口双黒魚尾「史記（小題幾）（丁付）」、巻一二〇以後は版心体式一定せず、単黒魚尾を混ず。下象鼻にまま字数、序目部分には「由八刊」、「葉才写」と刻工鈔手名あり。「秘閣／図書／之章」（朱方）、「日本／政府／図書」（朱方）の印記あり。

本版は集解索隠正義三注並に各巻首末の評文の刪削が甚しく、極めて粗笨なる翻刻本である。水沢博士は異刻本として取り上げ、史記諸版本との校合の結果をふまえ正文及び三注は明万暦三年南京国子監刊本に拠るものとされた。

4イ朝鮮刊本

首に、徐中行・茅坤・王世貞の三序（茅序は前掲諸本と異なり「刻史記序」と題す）を冠し、次に「史記索隠序」、同後序、「補史記序」、「史記正義序」、「史記正義列国分野」、「史記凡例」（評林の二字無し）、「史記正義論例」、同諡法解、「史記姓氏」（評林の二字無し）、譜系図・地理図計一五葉、「読史総評」を列載し、次に「史記目録」がある。首目のうち、集解叙及び引用書目を欠き、補史記一巻も無い。本文巻頭、「史記巻之一（隔七格）呉興凌稚隆輯校」、次行低一格「五帝本紀第一」と題す。尾題は首題程式に同じくも、巻一一等まれに巻数下に「終」字あり。四周双辺（二三・一×一五・四糎）、四周単辺を混える。有界、十行十九字、注小字双行十九字。版心白口双花魚尾、「史記巻之幾（丁付）」。

各巻首題下に「凌稚隆輯校」と題署されているものの、内題は「史記」とのみあり「評林」の二字は無い。諸家評説も巻首巻末の総説の類のみを残し、原本上層の標注及び行間の旁注はすべて省かれ、史記評林の体例とは甚だ相違している。但し、正文及び三注並に巻首巻尾の評文は前掲〔万暦〕刊本（3）に比し刪削の個処は無い。なお、水沢論文には本版についての言及はなされていない。

朝鮮版史記評林には他に顕宗実録字活字版があるが寡聞にし

て本邦儲蔵するところを聞かず未見である。誠庵文庫典籍目録著録の一本（欠巻七七―八二、四〇冊）には康熙二八（一六八九）年七月一一日の内賜記があり、同目はその年を刊年に繋げ粛宗一五（一六八九）年頃刊と推定している。本版の欵式は、毎半葉十行十九字であるという此の銅活字版にほぼ同じで、字様も顕宗実録字の風を帯び恐らくはその覆刻本であろうか。

〈静嘉堂文庫蔵〉 三三冊（9216）

空押卍繋橙色表紙（三〇・四×一九・六糎）、「史記目録（一―三十二）」と書名及び右肩に目録外題を墨書。巻八第三七・三八の両葉を欠き、補鈔を予定して十行罫紙二葉が補綴さる。

〈国立国会図書館蔵〉 三三冊（222.03-Si 229Rs-R (s)） 第二四冊（巻八一―八六）、同版零本を以って補配

空押卍繋橙色表紙（三五・六×二一・六糎）、「史記総目（一―三十二）」と書名及び右肩に目録外題が墨書さる。ごくまれに墨筆標注書入あり。巻一首眉上に墨筆で「買得於松禾宅」と。「惇五／甫印」（朱方）、「李氏／章鉉」（朱方）、「宣城／人　」（朱方）、「眠山／樵隠」（朱方）の印記、第二四冊には「東萊」（朱方）、「華／　伯」（朱方）、「鄭氏／仁邦」（白方）の印記あり。

〈宮内庁書陵部蔵〉 三三冊（303 40）

空押卍繁橙色表紙（三五・五×二一・七糎）、「史記目録（一―三十二）」と書名及び右肩に目録外題が墨書さる。

4ロ修本

〈岩瀬文庫蔵〉 有鈔配　三三冊（111 35）

空押卍繁橙色表紙（三〇・八×二〇・五糎）、「史記評林目録（幾）」と書名及び右肩に目録外題を墨書。茅序の末二葉を徐序末に、徐序末二葉を茅序末に誤綴。原刻葉の漫漶甚しく、補修補写葉が尠くない。次の各葉は補刻であろう（漢数字で巻数を、―で結びアラビア数字で丁数を示す）。徐序1、茅序2、目1 3 4 13 17、二―11、四―39、五―1 2 7 8 28、六―49 53 54、八―9 10 29 30 37 38、一〇―11 12 19 20、一二―15 16、一三―11、一四―2 3 21 22 32 33 55 56 68、一五―3 4 37 38、一六―19 20 23 24、一七―11 12 19 20 29 30、一八―24 39 40 63 64、二〇―15 16 21～24、二一―21 22、二四―3 5 6、二六―15 16、二七―8 41 42、二八―1 2 9 10 43～45、二九―5 6、三〇―5 18、三二―6 16、三七―1 2、三八―3 4、三九―6 31 32、四一―12～14、四三―13 14 23 24、四五―3 4、四六―9 10、四七―9 21 27～30 33、四八―13、五五―9 10、五九―7、六七―11 12、七五―7～9、七七―7 8、七九―15 16 21 22、八一―3～5、八六―5 6、八七―7 8、八九―11 12、九二―5 6、九五―12、九六―1～4、一〇二―5～8、一〇六―9、一〇九―5 6、一一〇―17 18、一一七―5 6 21 22 34、一二〇―7 8、一二一―5 6、一二三―11 12、一二八―7 8、以上の補刻葉は字様版式等一様でなく、或は逓次に補修されたものか。次の各葉は補写である。読史総評―19 20（但し、此の二葉の原刻葉は巻一第一九・二〇葉に誤綴され、巻一の第一九・二〇の両葉は欠葉）、一―29～32、二―12 15 16、三―13 14、四―9～12 25 26 35 36、六―1～4 19 20 23 24、七―17 18、九―15、一一―7、一二―1 2 9～12、一四―11 12 31 63 64 75、一五―13 14 31 32 39 40、一六―1 2 5～8、

一七—13 14 21 22 25 26、一八—25 26 31 32 43〜46 59 60 65 66、二〇—1 2、二一—1 2 13 14 37 38、二二—9 10 27、二三—1 2、二四—7 8 19 20 23 24 29 30、二六—9〜11、二七—27 28、二八—17 18 21 22 37 38 41 42 50、三〇—13 14、三一—3 4 13〜16、三二—3 4、三三—5 6 21 22、三四—3 4、三七—5 6、三八—1 2 5 6、三九—17 18 21 22 41、四〇—1 2 5 6 23 24、四一—3 4 7 8 11 13〜15、四二—3 4 9 10、四三—27 28、四四—1 2 5 6、四七—1 2 17 18、四八—1 2 7 8、五〇—4、五五—5 6 11 12、五六—5 6、五九—3 4 10、六〇—15、六二—1 2 5 6、六四—1 2、六九—19〜22、七〇—9 10 15 16 21 22、七一—7 8、七二—3 4、七三—3 4、七五—10、七六—1 2 9 10、七七—5 6、七九—9 10、八一—6、八二—1 2、八三—3 4、八五—1 2、九二—13 14、九五—3 4、九七—13 14、九九—11、一〇五—9 10 29 30、一〇六—7 8 15、一〇八—3 4、一〇九—3 4 11、一一〇—23〜26 29〜32、一一一—15 16、一一七—1 2 11 12 31 32、一一八—3 4、一一九—1 2、一二一—9 10、一二三—1 2 9 10 19 20、一二六—13〜16、一二八—23 24、一二九—5 6 9 10、一三〇—27 28

○李光縉増補本

5イ〔明万暦〕刊覆明万暦四年呉興凌氏刊遞修本

首に王世貞・茅坤・徐中行の三序を冠す（丁付は三序通しで計一二葉、末葉表終行に「序畢」、版心に「史記序」と題さる）。茅・徐二序末の題署程式は上述諸本と異なり、茅序は「万暦丙子年季冬月朔日帰安茅　坤書」と、徐序は「万暦丁丑歳仲秋月之吉日／賜進士出身中奉大夫江西布政使司右布政／使天目徐中行撰」と題署さる。以下「史記索隠序」より「読史総評」に至る序次は前記内閣文庫蔵原刻修本に同じで、本版には更に「読史総評」の次に「短長説」二巻（首、「附　短長説（下）」、上巻首に「上」字無し）を附し、次に「史記評林目録」「補史記」一巻（首、「補史記〈隔九格〉呉興凌稚隆輯校温陵李光縉増補」と題す）があり本文に接続する。本文巻頭、「史記評林巻之一（隔五格）呉興凌稚隆輯校温陵李光縉増補」、次行低一格に「五帝本紀第一」と題す。只、巻二〇及び二一は大題下、「呉興凌稚隆輯校」と輯校者名のみ大字で刻され、増補者の題署はない。また巻二二は輯校者・増輯者両名ともに題署無し。尾題は「史記評林巻之幾終」と。四周単辺（二四×一三・九糎、高さ四糎の上層を含む）、有界十行、行十九字、注小字双行、行十九字、眉上標注行七字、凌氏按語及び李光縉増評は一格を低し行六字。正文には句点声点及び傍注が付刻さる。版心白口単黒魚尾、「史記巻幾（小題）（丁付）」、下象鼻にまま刻工名あり。但し、この刻工名は姓名・刻入個所並に原刻本に同じであり、底本の刻工名の一部をそのまま覆刻したものである。史記正義序の末葉裏尾題前に、「建陽後学雲浜熊体忠仝梓　献蒭劉朝箴」なる刊記を有す。

首の「史記評林凡例」末、凌稚隆序に直接し李光縉自序（尾、「温陵後学李光縉識」と題す）があり増輯の顚末を述べ「顧又聞徐龍湾叙史評。以凌不及録其評為恨。余用是据摭葵陽老師及鳳洲・龍湾・九我・了凡・如崗諸名公言、眎凌評倍之、毎段冠

一増字示別。而余也欵啓、漫着光縉曰三字、与凌評竝云」と。葵陽は黄洪憲、鳳洲は王世貞、龍湾は徐中行、九我は李廷機、了凡は袁黄。如崗は陳大科か。「史記評林姓氏」末に「増補」として呉国倫・徐中行・黄洪憲・盧舜治・屠隆・袁黄・李廷機・焦竑・陳懿典の九氏を加え、「史記評林引用書目」末に「王鳳洲四部稿」・「李滄溟集」・「焦氏類林」・「焦氏筆乗」を、「読史総評」末に盧舜治の評文を増補する。

本版は、前記明万暦四年呉興凌氏刊遞修本（1ニ）の覆刻増輯本で、本文及び注文の行格は同じく字様も近似する。また、ま見える刻工名も底本に一致し、上欄の標注は李光縉の増補部分を除けば、内容刻入個所ともに前刻と同じである。李光縉の増補せる注は凡例末の李氏自序に云う如く、圏で囲んだ「増」字を冠して凌氏輯評との別を明示し、主として上層に、或は項羽本紀、高祖本紀等の巻末にも見える。内容は歴代諸家の所説に亘るが明人の評説が最も多い。また上層には李氏自らの按語を「光縉曰」の三字を冠し一格を低げ行六字で標示する。

李光縉、字は宗謙、衷一と号した。泉州府晋江県の人である。父仁（字は静甫、一泉と号す）は嘉靖七（一五二八）年の挙人で戸部主事に任じた人物であるが、光縉四歳の時に歿している。光縉は一九にして諸生となり、同郷の蘇濬（字は君禹、紫溪と号す。晋江の人。嘉靖二〇〈一五四一〉年生、万暦二七〈一五九九〉年歿、万暦五〈一五七七〉年の進士）に師事した。濬は「異日必成大儒」と言って光縉の才覚を嘉賞した。万暦一三（一五八五）年、郷薦第一名で挙人となる。しかしながら、婁次会試に応ずるも、遂に進士たるを得ず、仕進の途を絶つに至った。著に景壁集、四書要旨、四書臆説、易経潜解、読史偶見、南華膚解、蘇文抄評、杜詩解等がある。清康熙二三年序刊清金鋐等編福建通志巻三九、清乾隆二八序刊清黄任等編泉州府志巻四四に伝がある。

尚、後述する紅屋板史記評林（11 12）首に冠せる黄洪憲の「叙李生増補史記評林」に「乙酉穐、不佞奉天子命、逞校士抜其尤、首得宗謙子宗。謙閩之晋安人、晋安古温陵地也」とみえ、乙酉は即ち万暦一三年で、此年、黄洪憲は考試官として閩都に在り（注13）、光縉を解元に抜擢している。

〈東京大学東洋文化研究所蔵〉存巻五―七、一五―一八、二五―三六、七二、七四―七八、九七、一〇一

前記（1ホ）、明万暦四年呉興凌氏刊遞修本六四冊（正史・史73）の補配部分である。管窺の及ぶところ此の配本が最も早印とみとめ得る。

本版の初印完本は未だ管見に入らず、以下の後印・後修本が見在する。

5ロ 宏遠堂熊氏印本

〈京都大学文学部蔵〉有配鈔　天保一二年・弘化二年校本　二四冊（文哲中1C9-3）　鈴木豹軒手沢本

茶色表紙（二七・六×一七・二糎）、外題は「史記評林」と墨書され、右に目録外題が書さる。封面があり「凌太史輯／史記評林／李鮮元補　陳耀吾重刻」と。最終尾題後五行を隔て「宏遠堂熊氏／増補繡梓行」と双辺両行木記を有す。正義序後の刊記と此の木記及び封面の「陳耀吾重刻」との何れを刊行者或は印行者と看做す可きか判断し難いが、次述の修本の現存するこ

とに勘案し、刊記の熊体忠・劉朝箴を刊者とみ、宏遠堂熊氏を印行者とみて、封面の陳耀吾は一応無視しておく。或は熊体忠と宏遠堂熊氏とは同一なるやも知れず、或は此本はすでに熊氏刊本に依る陳氏の重刊本であるやも知れぬが後考を俟つ。短長説第一〇七葉、巻一〇第一九・二〇葉、巻二七第四六葉、巻三二第一七至二六葉、巻三七第七・八葉、巻六〇第一五葉、巻七三第一一葉、巻一二六第一五・一六葉補鈔。一部に朱句点朱引、時に校語等の書入があり、次の朱筆校読識語が著さる。

保丑二月廿八日校了（巻六末）

保丑三月朔校了（巻一〇末）

弘巳仲春十一日（巻三七末）

弘巳二月十二日（巻四〇末）

保丑は天保一二（一八四一）年、弘巳は弘化二（一八四五）年か。「張州木家／図書之記」（朱長方）、「岸氏家／蔵図書」（朱長方）、「豹軒／図書」（朱方）の印記あり。

5ハ修本

巻七〇第一九・二〇葉等補刻あり。

〈宮内庁書陵部蔵〉 巻五―一二、一九―二二、二七―三〇、一二七―一三〇配明万暦四年呉興凌氏刊遞修本　二〇冊（267 110）

茶色表紙（二六・九×一六・五糎）、書題簽「史記首巻（本紀・世家・列伝）」等と墨書、その下に略目を小書する。封面なし。巻五至一二、一九至二二、二七至三〇（以上巻頭大題下方の輯校者名の題署なし）、巻一二七至一三〇（巻頭、「呉興凌稚隆輯校」と題さる）は凌氏原刻の版板を襲用し、漫漶が著るしい。「由利／義恭」（白方）、「光源」（朱長方）の印記あり。

〈内閣文庫蔵〉 二四冊（別231）

茶色表紙（二六・七×一六・七糎）。封面無し。巻末末葉裏左半部分は料紙が剪り取られていて原木記の有無不明。ほぼ全篇に亘り朱句点朱引墨訓点、音義訓釈校語、或は諸書よりの引抄等の書入がなされ、ほぼ二手を認め得る。一は、江戸前期のものと思しく、通鑑・玉海等の抄録或は「師説云」と標記せる書入が多く、次の本奥書を有す。

本云此史記者所謂索隠正義也去歳秋之季有一个俗漢売却之披而覧則朱点也／倭点也先輩加焉雖然有餘不足以為根而已日之昨就東山継天西堂仮　其／師幻雲老翁所秘之本朱句倭点訂正之蓋老翁者予遊其門者閲三十霜／豈無所由也哉鴻恩於存亦如是於没亦如是呼／天文八載己亥昏春二十五日　善恵山人仙也五十齢判（巻二末）

天文八己亥首夏之十蓂?於善慧東軒下朱句倭点畢其功云／瓢闇山人五十載判（巻一〇末）

本云此一帙自第一至第八朱句墨点考正者乃天文八己亥夏五之蓂?二日也／　善恵瓢闇山人半百齢（巻三八末）

本云天文八己亥夏五之十又四於善恵境中朱句墨点等考之瓢山人五十齢（巻四七末）

天文十辛丑孟夏二十又一於栗之東窓下首書等記焉　瓢庵山人五十二齢／同十七稔戊申九月念一以一韓所点之本重加倭点而已　瓢也五十九（巻一〇九末）

本云天文十稔辛丑夏五之念八於栗棘書院記焉　瓢山人五十

二齢／同同十七戊申九月念八加一韓師之倭点了　仙也五十九（巻一一八末）

本云右一帙天文十辛丑六月七蕚於栗之東白軒下記焉　瓢山人五十二載／同天文十七戊申小春四加一韓師之点而已　瓢也五十九（巻一二六末）

本云亀策伝虽如旧本加点未通義理待精史学之人以可究其深奥者也

本云天文十辛丑六月十一於栗之東白軒下記焉　瓢山人五十二齢／天文十七戊申小春初七加一韓師之倭点　仙也五十九（巻一二八末）

本云此書百三十巻首書并句点以幻雲師之秘本鈔之記之予比年／或守栗棘之祖塔或領恵日之住持或為栗赴登州之行繇此／因循経年閲月而已莫訝〻／于時天文十辛丑六月十四蕚　瓢闇山人五十二齢判／天文十七戊申小春初旬以一韓師之本重而加倭点太半塗朱而已／　仙也五十九（巻一三〇末）

一は、巻六（始皇本紀）、二五（律書）、二六（暦書）、二七（天官書）、六三（老荘申韓列伝）、六七（仲尼弟子列伝）、八六（刺客列伝）等主として欄上にみられる朱墨の書入で、銭大昕、何焯、竹書紀年等諸家諸説の引抄、或は校語を交えるもので、住々「彦博按」、「博按」と標記され、猪飼敬所自筆かと思われる。敬所には太史公律暦天官三書管窺三巻の著がある。「日本／政府／図書」（朱方）の印記あり。

5ニ種徳堂熊氏遞修本

巻六六第一一・一二葉補刻。「帰安凌以棟先生輯／史記評林／　書林熊沖宇家友于梓」（上辺外に「原本重刊」と横書）なる封面があり、右下方に「本衙蔵板／翻刻必究」の双辺長方朱印が鈐さる。巻末の木記の「宏遠」二字を「種徳」と控改し「種徳堂熊氏／増補繡梓行」と。

〈大阪大学附属図書館蔵〉　三二冊（2-01.03 史記 岡SHI）　岡田文庫

栗皮表紙（二六・五×一五・九糎）、新補書題簽「史記評林一（—三二）」。一部に朱引、朱句点、墨筆の返点送仮名等の書入あり。

〈同蔵〉　欠補史記一巻　三〇冊（2-01.03 史記 北SHI・H）　目録及首三巻（第二冊）配明万暦四年凌氏刊本　北山文庫

第二冊配本は白棉紙印本。黄色表紙（二七×一五・四糎）、書外題「史記評林　一（—三十）」、右肩に目録外題が墨書さる。朱点朱引、眉上に朱標注書入あり。「黙庵／所蔵／之印」（朱方）、「吉田／鋭雄／蔵書」（朱方）、「北山／文庫」（朱方）、「読耕斎／之家蔵」（朱長方、第二冊のみ）の印記あり。第二冊見返右下方に藍筆で「此冊係林読耕斎旧蔵／北山田　識」と。

〈九州大学中央図書館蔵〉　欠王世貞序・目録・補史記一巻並首六〇巻　九冊（630 シ27）

外題下の冊次数を勘案するに原二〇冊、その内第二至一二冊を欠く。香色表紙（二五・九×一六・二糎）、書外題「史記　序凡例一（十三—廿止）」、目録外題墨書。朱引朱句点の書入あり。「成沢／氏　／蔵書」（朱方）、「寺尾／寿／所蔵」（朱方）、「音無文庫」（朱長方）の印記あり。

〈宮内庁書陵部蔵〉　二五冊（268 29）

茶色表紙（二五・八×一五・三糎）、外題は大題無く右肩に目録外題のみを墨書。封面なし。一部朱引朱句点の書入あり。「養賢閣／図書記」（朱長方）、「帝室／図書」（朱方）の印記あり。

6イ 寛永一三（一六三六）年京誓願寺前八尾助左衛門尉刊

覆〔明万暦〕刊種徳堂熊氏修本〈八尾版初刻本〉

唐本仕立。原題簽は「史記評林　幾」、題下には第一冊に「序目録」、第二冊に「巻読史総評」、第三冊以下「一之二」等と巻数が刻され、最終冊は「一百二十九之三十終」とある。序目の内容は底本である前記、〔明万暦〕刊種徳堂熊氏遞修本（5ニ）に同じく、本文巻頭、行格欵式等並に底本の程式を襲う。巻頭は「史記評林巻之一（隔五格）呉興凌稚隆輯校　温陵李光縉増補」、第二行低一格「五帝本紀第一」と題す。四周双辺（二二・九×一三・五糎、高さ三・九糎の上層を含む）、無界、十行、行十九字、注小字双行、行十九字、上層標注行七字、凌・李両氏按語は低一格行六字。李氏増評には墨囲の「増」字を冠す。正文には句点声点縦点返点送仮名振仮名及び旁注が、三注には縦点返点送仮名が付刻さる。但し、首の「史記集解叙」を除く序目、読史総評、短長説及び標注並に巻首巻尾の諸家評説には加点無し。また巻一五至二二は正文の句点声点のみで、返点送仮名等の付刻はない。版心白口単黒魚尾「史記巻幾（小題）（丁付）」、下象鼻に刻工名・字数が刻さる。巻末本文は最終葉表第三行で終り、その後版心に近く「種徳堂熊氏／増補繡梓行」の原木記が刻され、その裏葉第一行に尾題があり、その後に「于時寛永十三丙子年／九月上旬／　洛陽三条寺町誓願寺前／（低八格）八尾助左衛門尉／（低一三格）開板」なる刊記を有す。

巻二三第五葉版心中縫に「正義点」とみえるが、点校者名不詳。只、後代俗に悪点本と言われた（正斎書籍考巻三）。

本版は爾後簇出せる和刻本の嚆矢であり、後出諸版の範式を成したものとして意義がある。後述する如く、八尾再刻本が寛文延宝間に刊行された後も元文元年に訓点を削去して印行されており、版木は一世紀以上に亘って襲用され伝本は可成の多きに登る。只、初印本の伝存するものは極めて尠なく管見の及べる完本は次の神宮文庫及び東北大学附属図書館儲蔵の二本のみである。

〈神宮文庫蔵〉　五〇冊（五乙二い1812）

白色表紙（二八×一七糎）。首の序目、王世貞叙より「史記評林引用書目」までの順次は前記明版（5）に同じく、以上を第一冊とし、第二冊に「読史総評」及び「短長説」を収め、目録は題簽の標示とは相違し第三冊首、「補史記」の前に置く。「宮崎／文庫」（朱方）、「神宮／文庫」（朱方）の印記あり。

〈東北大学附属図書館蔵〉　三〇冊（狩3 5960 30）　狩野文庫

栗皮表紙（二八・八×一七・四糎）、外題なし。王世貞叙より短長説までを首冊とし、目録は第二冊首補史記前に配す。墨筆の訓点訂正書入あり。「水原氏書車」（朱長円）、「成芙館」（朱長方）、「荒井泰治氏ノ寄附金ヲ／以テ購入セル文学博士／狩野亨吉氏旧蔵書」（朱長方）の印記あり。

〈九州大学中央図書館蔵〉　巻五・六、三九―四五、五三―六

〇、九一―九九配寛文一二―延宝二年八尾甚四郎友春刊本、巻七配明和七年世裕堂刊本、巻三一―三八配寛文一三年積徳堂刊本　二七冊（630シ46）

紺色表紙（二六・六×一六・九糎）、題簽欠落。目録は集解叙と史記正義論例との間に誤綴さる。本帙は、各々装訂を異にする四種の版本の取り合せ本で、寛永版の存巻は首―巻四、巻八―三〇、四六―五二、六一―九〇、一〇〇―一三〇の九五巻。各冊首に「逍遙文庫／宗盛一氏寄贈」の長方青印が鈐さる。

6ロ後印本

巻末の刊記第三行の「誓願寺」を「本能寺」と控改。題簽は初印本に同じ。

〈斯道文庫蔵〉　五〇冊（シ25B 2-3）

空押斜格子瑞鳥雷紋香色表紙（二八×一七・五糎）、目録外題が墨書さる。目録は首冊末の引用書目の次に配さる。処々朱句点朱引、眉上行間等に朱墨の校字等の書入があり、墨筆或は朱筆で訓点が訂正されている。「山本／蔵書／之印」（朱方）の印記あり。

〈同蔵〉　欠巻一―四　四八冊（ヤ25B 2-2）　安井文庫

香色表紙（二八×一八・二糎）、目録外題を墨書。

〈無窮会蔵〉　五〇冊（真軒525）

茶色艶出表紙（二七・九×一七・六糎）。眉上に朱の校語等の書入、一部朱句点朱引の書入あり。「真軒／蔵書」（朱長方）、「無窮会／神習文庫」（朱長方）の印記あり。

〈同蔵〉　五〇冊（織田3358）

茶色艶出表紙（二八・八×一八・五糎）、目録外題を墨書。朱句点朱引の書入あり。「勿来／菴蔵」（朱不整円）、「景／臨」（白方）、「織田／氏図／書記」（朱方）、「無窮会／神習文庫」（朱長方）の印記あり。

〈内閣文庫蔵〉　五〇冊（史8 5）

香色艶出表紙（二七・七×一七・七糎）。「秘閣図／書之章」（朱方）、「秘閣／図書／之章」（朱方）、「紅葉山本」（朱長方）、「大学校／図書／之印」（朱方）、「日本／政府／図書」（朱方）の印記あり。

〈神宮文庫蔵〉　五〇冊（五乙二い1813）

薄茶色艶出表紙（二七・四×一七・四糎）目録外題が墨書さる。目録を徐中行序と索隠序との間に配す（以下の後出印本はおおむね此の順次に同じである）。朱句点圏点朱引、行間・欄外余白或は附箋に朱又は墨筆で、漢書・杜氏通典・通鑑等との引照、徐孚遠・陳子龍・王念孫・岡白駒等諸家の注説を抄録せる書入がある。「□?曲／在?六」（白方）、「寄納／神宮文庫／橋村正璟」（朱長方）、「橋村氏／蔵書記」（朱長方）、「神宮／文庫」（朱方）の印記あり。

次の無窮会及び京都大学儲蔵本は題簽が改刻され、書名下に第一冊は「序目」、第二冊は「読史総評」、末冊は「百廿九之三十／大尾」と刻さる。

〈無窮会蔵〉　五〇冊（天淵169）

薄茶色艶出表紙（二六・八×一七・五糎）。一部朱句点朱引の書入あり。末に朱筆で「維時昭和十九年十二月二十六日一読了

加藤虎之亮識」と読書識語がある。「知我／者誰」（白方）の印記あり。

〈京都大学附属図書館蔵〉　五〇冊（5-42 シ1貴）　皆川淇園自筆書入本

香色艶出表紙（二七・二×一七・七糎）、右上方に目録外題が墨書さる。目録は索隠序と同後序との間に誤綴され、読史総評及び短長説は末冊に配す。全帙に亘り、朱引朱句点が施され、処々訓点を訂正し、首序の原三序、正義序、凡例等無点の個所には朱筆で加点さる。欄上及び上層或は行間余白に、校語、語義、按語等、主として朱筆（青墨を交える）の書入がなされ、殊に巻二三礼書・巻二四楽書・巻三〇平準書・巻六一伯夷列伝・巻六二管晏列伝・巻一〇五扁鵲倉公列伝・巻一二二酷吏列伝・巻一二九貨殖列伝等に周密で、まま「愚按」の二字を標記するところあり。巻二夏本紀・巻三殷本紀・巻三四燕召公世家等に尚書正義より抄録せる墨筆の書入があるが或は別筆か。淇園には遷史戻柁三巻、太史公助字法二巻の著がある。

〈天理図書館蔵〉　五〇冊（古122 1 1）　伊藤東涯・東所・東峯等書入本

薄茶色艶出表紙（二七・五×一七・五糎）。題簽は再度改刻され、書名下の巻次数が無く、「序／目録」、「一之二」等と墨書さる。朱墨青で圏点、眉上に校語、字傍に音義等の書入があり、訓点を訂正す。末の原木記直前に墨筆で「寛政壬子四月廿八日会読全業矣韶」と、また短長説末に朱筆で「壬子五月十一日会読了韶」と東所の読書識語がある。

6ハ元文元（一七三六）年修本

本版は後年、京都書肆林権兵衛・銭屋庄兵衛両名の蔵板に帰し、元文元年、訓点を削り白文本として印行された。題簽は、第一冊に「史記評林　序目　乾」と題し、書名下方、第二冊は「読史総評　坤」、第三冊以下「帝紀一之三」等と紀・世家・表・書・伝の別及び巻数が刻さる。封面、「帰安凌以棟先生輯／史記評林（飛白体）／　皇都　書肆　（書肆名未刻）」と題す。目録は史記正義論例と謚法解との間にある。

寛永原刻本の返点送仮名及び巻末の種徳堂熊氏の原木記を刪去し、刊記の第一行は原刻のままであるが第二行以下を削り、

「元文元年辰九月改
皇都書林　間町通御池上ル町　林権兵衛
堀川通綾小路下ル町　銭屋庄兵衛」

と入木改刻されている。

本後修無点本は見存尠く、管見に入ったのは次の懐徳堂本一部のみ。佐賀県立図書館所蔵鍋島家文庫目録著録本二四冊（鍋993.2 52、欠巻一―三、一九―二一）があるが未見。　（追記3）

〈大阪大学附属図書館蔵〉　三〇冊（2-01.03 記 史 SHI 堂 懐徳）　三村崑山手鈔史記雕題書入本

茶色表紙（二六・六×一八糎）。書入は三村崑山手鈔で、欄上欄脚或は附箋に師中井履軒の史記雕題が移写され、本文行間には訓点の書入がある。「有不／為斎」（朱方）の印記あり。

本版の板木株は天明九（一七八九）年（正月二五日寛政元年と改元）寛政元年の間に、京都林権兵衛・銭屋庄兵衛両名よ

り、京都小川多左衛門・林伊兵衛両人の所持となったようで、(注14)同年五月には、此の両人より、大坂奈良屋長兵衛が求板し、柏原屋清右衛門・同与左衛門・増田屋源兵衛三軒との相合板となった。但し、此時板木半分は既に焼失し、残り板木は三百三拾弐枚であった。さらに寛政四（一七九二）年正月には、奈良屋等四軒より八尾板支配人である敦賀屋九兵衛・井筒屋伝兵衛両人へ永代売渡しされ、且又、敦賀屋・井筒屋は半数乃ち板木百六拾六枚を紅屋板元中（敦賀屋九兵衛・河内屋喜兵衛・糸屋市兵衛）へ永代売渡している。此間の経緯は、奈良屋等が史記評林論又入並に同点付の願株に対して、八尾板元の敦賀屋九兵衛等が類板として差構えの態度に出たため、当時の大坂書林行司平野屋半右衛門等が仲介に入り、行司計らい双方合意事件落着に伴って生じたことで、裁配帳第二番史記一件出入（大坂本屋仲間記録第九巻　大阪府立中之島図書館　昭和五七年三月）に詳細に記されてある。また京江戸書状之控（同第十巻　昭和五八年三月）及び京都書林行事上組重板類板出入済帳（宗政五十緒・朝倉治彦編　京都書林仲間記録二　東京ゆまに書房　昭和五二年七月）に慶應元（一八六五）年九月の京都丸屋善兵衛より大坂秋田屋太右衛門宛ての「永代売渡申板木之事」(注15)が記され、売渡板木五点の内に史記評林古板無点焼株が見え、慶應元年九月に大坂秋田屋太右衛門が、京都丸屋善兵衛支配浅井伊予助蔵板を求板したことが明瞭であるが、寛政四年以後慶應元年までの間に、本板株が、大坂より京都へ移った事情については未詳。

○

7ィ寛文一二（一六七二）年―延宝二（一六七四）年京八尾甚四郎友春刊本〈八尾版再刻本〉

首目の順次は寛永一三年刊後印本の神宮文庫蔵本以下の諸帙に同じで、目録は徐中行序と索隠序との間に配さる。茅坤・徐中行両序末の題署は明刊李光縉増補本（5）・寛永十三年刊本とは異なり、凌氏原刊本（1）の程式を襲用している。また正義序末の原刊記は除去される。本文巻頭題署程式は「史記評林巻之一（隔五格）呉興凌稚隆輯校　温陵李光縉増補」、第二行低一格「五帝本紀第一」とあり、寛永一三年刊本（6）に同じ。四周単辺（二二三・八×一六・四糎、高さ四・二糎の上層を含む）、無界、十二行、行十九字、注小字双行、行十九字。上層標注行七字、凌李両氏按語低一格行六字。李氏増評には墨囲の「増」字を冠す。欄上に行二字或は三字の校語を附刻（有框）。正文、三注のほか前付の原序・凡例・読史総評・短長説、各巻首尾の諸評論並に上層標注にも返点縦点送仮名が刻され、正文には更に句点声点傍注のほか所々振仮名が附刻されている。首序・続史総評・短長説、諸家評論及び標注への加点は寛永刊本にはなく八尾版としては本版が初出である。後述するがほぼ同時期に刊行された紅屋板初刻本（11）にも同様の加点がある。版心、大黒口単黒魚尾、上象鼻に「寛文壬子年刊」と陰刻、その下に「史記巻幾」、魚尾下中縫に小題及び丁付があり、下象鼻に「八尾友春」と陰刻さる。巻四五末葉表（版心題「寛文壬子年刊　史記巻四十五　終」と、小題及び丁付なし）に「寛文十三癸丑年仲夏吉辰／　洛陽寺町通本能寺前／八尾甚四郎友春開板」と、また巻末本文末一行

を隔て「延宝二甲寅暦仲夏吉辰／洛陽寺町通本能寺前／八尾甚四郎友春重刊」の両刊記を有す。

本版の刊年は従来寛文一三年とされ、延宝二年はその補修年とみられていた（長沢規矩也「和刻本史記解題」）が、寛文一三年の刊記が巻末ではなく巻四五末にあり、更に巻末に延宝二年の刊記を有し、版心に「寛文壬子（一二）年刊」とあることを勘案すれば、本版の刊刻は寛文一二年に始まり、寛文一三年にまず巻四五までが公刊され、延宝二年に至って全帙完整したと看做すべきであろう。

倭板書籍考巻四に「寛文（「文」は「永」の誤記か）十三年洛陽矢尾氏刊本ニハ点ナシ頃ロ福山水野君ノ儒士中嶋道允評林ニ点ス此本ニハ陳明卿ガ史記考ヲ附ス好本ナリ」（注16）と見え、加点者は福山藩儒中嶋道允と推定しうるが、中嶋道允については未詳。管見の及ぶところ陳明卿史記考を付せる史記評林の所在は知れないが、現今単行書として架蔵されている諸儲蔵本をみるに、字様欵式並に八尾板再刻本に似、版心に「寛文壬子年刊」、「八尾友春」と刻され、神宮文庫儲蔵の早印本には延宝二年の八尾甚四郎友春の重刊記を有す。また元禄九年刊増益書籍目録大全、同宝永六年増修本、同正徳五年修本に八尾版史記考五冊が著録され、見在の後印本に、享保二年の京都金屋半右衛門の求版記があることから、刊行当初より元禄正徳の間に八尾が本書を史記評林に添えて頒行したことは充分に考え得ることである。

〈宮内庁書陵部蔵〉 二〇冊（267 111）

改装茶色表紙（二六・九×一九・二糎）、外題は第一冊のみ「史記評林　一」と、第二冊以下は「史記　幾」と墨書さる。ほぼ全巻に亘り朱引が施され、一部に朱句点、眉上にまれに校字書入あり。「図書／寮印」（朱方）の印記。

〈東北大学附属図書館蔵〉 首至巻四配寛永一三年刊本、巻五至七、一二二至一三〇配天明六年刊寛政四年修本 二〇冊（222 113 1-5）

改装縹色布目表紙（二六・七×一九・一糎）、補配の第一・二冊は同（二五・四×一七・二糎）、第三・二〇冊は同（二五・四×一八・五糎）、新補書題簽「史記評林（下方に該冊所収の巻次を全記）」。配補の末冊には後述の天明六年刊寛政四年修本（8ロ）と同版の奥附があるが、書林名右端が「伊藤七郎兵衛」と入木改修されている。「文化辛未」（朱長方）、「宮城中／学校図／書之印」（朱方）、「第二高／等中学／校図書」（朱方）の印記あり。

〈静嘉堂文庫蔵〉 巻七九―八二配明治一二―五年万青堂別所平七刊奥田遵校本 五〇冊（40 17） 田中頼庸旧蔵本

茶色表紙（二七・三×一九・五糎）、題簽を有し、上方小区画に右から左へ「新刻校正」と角書があり「史記評林幾」と題さる。一部朱句点朱引書入、眉上に史記測義、遷史戾柁、史記鰌等からの朱筆引抄書入があり、内に「謙按」の按語を交える。「勢陽津城／富岡蔵記」（朱長方）の印記あり。

〈神宮文庫蔵〉 欠巻六一―六七、九六―一〇六、一二六―一三〇 大四三冊（五乙二い 1807）

栗皮表紙（二七・一×一九・四糎）、題簽静嘉堂文庫本に同板。目録外題を朱書。寛文一三年の刊記は第一冊後見返に貼付されている。一部朱句点、眉上に朱標注書入あり。第一冊見返に

「中川経晃奉納」と墨書。「経／晃」（双郭朱方）、「林崎文庫」（朱長方）、「文殿／之印」（朱方）、「神宮／教院」（朱方）の印記あり。（追記4）

〈大阪府立中之島図書館蔵〉 欠目録・巻一―六、大二六冊（332.1 22③）

濃縹色表紙（二六・一×一八・六糎）、題簽角書は「新版考正」と刻され下方の巻次数はない。寛文一三年の刊記欠落。以下の後出印本はすべてこの刊記を欠く。眉上行間等余白に墨筆（朱筆も交える）の書入が周密。書入は主として史記雕題よりの移写である。また処々胡粉を用い訓点が訂正さる。本帙は、中井履軒の史記雕題に倣い、秦本紀巻末より亀策列伝に至る計一三篇を抜き出し、「削柿」上下二冊に別綴されている。「岡本／蔵書」（朱方）、「岡本撫山翁／遺書寄贈記」（朱長方）の印記あり。

7ロ修本

首の茅坤・徐中行二序の丁付を改刻。即ち前記初印本は王世貞叙、一至三、茅坤序、一至三、徐中行序、一至四とあったものを、茅・徐二序の丁付を王叙に続け四至十と改刻。また巻一二三至一二五は丁付を巻一二二末葉第十八丁に続け十九至四十七と通しに改め、尾題及び版心の巻数を各巻「一百二十二」とする。（追記5）

〈都立中央図書館蔵〉 二五冊（和195）

薄茶色表紙（二七・一×一九・三糎）、題簽角書は「新刻校正」とあり、大題下方に巻次数あり。

7ハ遞修本

前付の丁付改刻。即ち王世貞叙首葉より引用書目末葉までを通しで「一」至「六十八」とし、読史総評と附短長説上・下を通しで短長説首葉より末葉までを「十八」至「四十七終」と改める。（前掲都立中央図書館蔵本等早印本の丁付は徐中行序の次の目録を一至十五、索隠序より引用書目までを一至四十三、読史総評を一至十七、短長説を一至三十終とする。）

題簽角書は「新刻校正」或は「新版考正」と刻さる。

〈滋賀大学附属図書館教育学部分館蔵〉 五〇冊

香色表紙（二七×一九糎）、後補書題簽「史記」と墨書。朱圏点朱引、眉上に墨筆標注書入あり。「正新館／図書記」（朱大長方）の印記。

〈同蔵〉 欠巻六一―六七、一〇七―一三〇 二〇冊

縹色表紙（二七・七×一九・八糎）、題簽角書は「新版考正」。「稽古館」（朱長方）、「彦藩／弘道館／蔵書印」（朱長方）、「大津師範学／校書籍縦覧／所蔵書之印」（朱方）の印記あり。

〈神宮文庫蔵〉 欠巻八三―九〇 二四冊（五乙二い1814）

茶色表紙（二七・七×一九・二糎）、題簽角書「新版考正」、但し殆ど剝落。各冊首葉右欄外余白に「奉納勢州御文庫異邦之史記全百三十巻二十五冊享保癸卯孟夏之吉授江梅庵主人合田新稽首百拝（印）」と墨書捺印さる。「宮崎／文庫」（朱方）、「神宮／文庫」（朱方）の印記あり。

〈同蔵〉 二五冊（増四・五丁三ろ3126） 山口猛之亮献納本

縹色布目表紙。題簽角書「新版考正」、但し殆ど剝落。「藤／

園」（朱方）、「神宮／文庫」（朱方）の印記あり。　（追記6）

〈都立中央図書館蔵〉　二五冊（特6603）

空押市松紋様濃縹色布目表紙（二五・八×一八・八糎）、題簽角書「新版考正」、大半が剝落し、書題簽を補う。

〈刈谷市立刈谷図書館蔵〉　二五冊（3321）　村上文庫

縹色表紙（二七・八×一九・一糎）、題簽角書「新版考正」、目録外題を朱書す。ほぼ全巻に亘り朱引が施さる。

〈蓬左文庫蔵〉　欠巻一二四・一二五　二五冊（6013）

縹色表紙（二七・七×一九・一糎）、題簽なく「史記一（一二十五畢）」と朱書、目録外題が朱書さる。

〈大阪大学附属図書館蔵〉　二五冊（K2-01-03 SHI）

空押卍つなぎ縹色表紙（二六・五×一八・九糎）、題簽角書、「新版考正」。「屋庫／守文」（朱方・回文）、「原田氏／蔵書印」（朱長方）、「宮崎／蔵書」（朱方）の印記あり。

〈同蔵〉　中井履軒自筆雕題書入本　二九冊（2-01-02 史記 SHI 懐徳堂）

空押菊花唐草紋縹色布目表紙（二七・六×一九糎）、題簽角書、「新版考正」。本帙は首冊の前に「史記削柿」上下二冊を配す。此の両冊は題簽の評林二字を削去して「削柿」と墨書し、上冊に原本の序、読史総評等目録を除く前付を収め、下冊に補史記以下亀策伝に至る一三篇を収め、首冊の目録首眉上に「評林有首／巻二冊目録／之外無足存／者今采目録／而余皆刪之」と。朱引墨句点、上層及び欄上に墨筆書入がある。この書入が後に履軒門人の手によって整理され未刊ながら「史記雕題」として伝写され通行した。全篇にわたって墨筆で訓点が訂正されている。「天生／寄進」（朱長方）、「天楽」（朱長方）の印記あり。

〈斯道文庫蔵〉　松崎慊堂自筆書入本　二五冊（091 ト133 25）

空押唐草縹色布目表紙（二七・七×一九糎）、題簽角書「新版考正」。朱引朱圏点が施され、書入は本紀及び列伝後半に周密で、欄上及び上層余白に主として狩谷棭斎蔵震沢王氏覆宋刊本、他に唐本評林本・明南監本・汲古閣本・史記論文・古活字本・新刻本等諸本との校合、及び陳明卿史記考、牛氏空山堂史記・漢書・史略・文昌雑録等諸家所説の抄録引照、並に慊堂の案語等を交える。目録末框外のど部に「復日手校宋板目尾有篆書震沢氏刻梓欵津軽卿雲望之所蔵」と墨書さる。「益城松氏」（朱長方）、「辛卯／明復」（白方）、「翰仙」（朱方）、「中山氏／蔵書／之記」（朱方）の印記あり。中山久四郎博士旧蔵書。

〈京都大学人文科学研究所蔵〉　首目配寛文一三年積穂堂刊本（紅屋板）　二四冊（史Ｉ３３）

縹色表紙（二七・八×一九・五糎）、題簽は元題簽の上に新刻題簽が重貼され、角書は「新刻／校正」と。第一冊首序より短長説までの序目は寛文一三年積徳堂刊本（11）で補配されているが、装訂題簽等は他冊と異ならない。補史記及び列伝に朱引朱句点圏点声点、欄上に朱藍墨の書入が周密。また処々訓点が訂正されている。書入は胡三省・徐孚遠・皆川淇園等諸家評説を抄録し案語を加える。「山本／蔵書」（朱方）の印記あり。

〈内閣文庫蔵〉　二五冊（279 31）

空押花紋濃縹色布目表紙（二五・六×一八・八糎）、題簽角書は「新刻校正」と。伯夷列伝等一部の行間或は欄上に墨筆の字

義等の書入あり。「平城／蔵書」（朱方・第三冊見返）、「山本／文庫」（朱方・巻一二六首）、「外務省／図書記」（朱方・消印）、「太政官／文庫」（朱方）、「日本／政府／図書」（朱方）の印記あり。

〈東北大学附属図書館蔵〉 二五冊（A丙2-317） 三矢重松旧蔵本

空押菊花紋茶色表紙（二六・八×一八・五糎）、題簽角書「新刻校正」、目録外題が墨書さる。墨朱青の書入周密。朱青の句点圏点（青筆は三注に限る）、朱引、欄上又は付箋に朱墨筆で銭大昕、方望溪・徐孚遠・何焯・顧炎武等諸家所論を抄録し、行間には朱墨青筆で振仮名、字義等の書入、また朱筆で処々訓点が訂正さる。次の校読識語あり。

安政元年十一月廿三日校　公復（巻八八末）

安政二年孟春廿有一日　復読（巻九九末）

安政二年卯二月朔朝読午日也　復（巻一一一末）

また巻一二五尾題後末葉裏に、

常陸なる筑波の峯のふもとには
　鬼とりひしぐ武夫ぞすむ
から錦立田の奥にひとむらの
　緑をのこす竹原の山
岩金もくだちざらめや武夫の国の
　為とて思ひ切る大刀

慶應三年丁卯正月十九日終　復堂書

と詠歌三首が朱書さる。復、復堂は頼支峯（山陽の次男）か。首冊見返に、「本書墨書書入ハ頼三樹也三樹此ノ本ヲ水戸ノ某士ニ贈レルナリト云フ／明治四十五年四月飯田町書店ニ求ム重松」と朱識語が見えるが、根拠詳らかでない。「長谷川／澄雄蔵／書之印」（朱方）、「三矢氏／蔵書／之章」（朱方）の印記あり。

〈京都大学附属図書館蔵〉 二五冊（42シ1） 河野鉄兜旧蔵本

空押菊花紋濃縹色表紙（二五・九×一八・七糎）、題簽角書、「新刻校正」、表紙或は見返に該冊所収篇名の目録が墨書さる。朱墨筆で上層或は欄上或は行間に校語語義等の書入、漢書・通鑑・史記測義等からの抄録がなされ、一部に朱引朱圏点が施され、処々訓点が訂正さる。「新塾／義書」（白方）、「故鉄兜河野龍遺書男河野天瑞寄贈」（緑長方）の印記あり。

〈大阪府立中之島図書館蔵〉 二五冊（532.1 24）

空押菊花文緑色表紙（二五・六×一八・七糎）、題簽角書、「新刻校正」。漫漶甚だしき後刷本。巻一二二第一七葉裏に部分的な補修改刻の根跡がある。「苔園田／部氏蔵／書印記」（朱方）、「田部苔園翁／遺書」（朱長方）の印記あり。

本板株は、前述（362頁）の寛永刊後修無点本焼株と同様、寛政元年五月、京都書林小川多左衛門・林伊兵衛両人より、大坂奈良屋長兵衛等四軒の相合株となり、(注17)更に寛政四年正月には奈良屋等より敦賀屋九兵衛・井筒屋伝兵衛に永代売渡され、且又その半株が紅屋板元中（河内屋喜兵衛・糸屋市兵衛・敦賀屋九兵衛）へ売渡されている。(注18)従って叙上の遡修後印諸帙は此等大坂書林によって印行頒布されたものであろう。また、慶應元年九月には無点本焼株とともに、京都丸屋善兵衛支配より大坂秋

田屋太右衛門へ売渡されているが、此時には既に焼株となっている。(注15) 寛政四年以降、大坂敦賀屋九兵衛等より京都丸屋善兵衛支配へ移った経緯については不詳。

8イ 天明六（一七八六）年京八尾甚四郎友春覆寛文一二至延宝二年刊本

次掲の修本の原刊記及び奥付に依る。見存完本の所在未詳。

〈滋賀大学附属図書館教育学部分館蔵〉 存序目・読史総評一巻並短長説二巻 一冊

空押菊花雷文繋濃縹色表紙（二六・二×一八・六糎）、題簽、「新刻校正」と角書があり「史記評林」の大題下方右寄に「序目録」と刻さる。「稽古館」（朱長方）、「彦藩／弘道館／蔵書印」（朱長方）の印記あり。本冊は次に掲出する修本諸帙に比し、印面精美なる早印本である。初印零本と見做し此処に著録する。

本板株は寛政元（一七八九）年九月、京都より、大坂雑喉屋三郎兵衛・板屋孫兵衛両人が半株、井筒屋伝兵衛・敦賀屋九兵衛がそれぞれ二歩半株の割で求板し、雑喉屋・板屋は素人故、その所持分は河内屋嘉市及び敦賀屋九兵衛が支配することとなった。(注19)

8ロ 寛政四（一七九二）年修大坂松村九兵衛等印本

本版は前記寛文一二至延宝二年刊本（7）の覆刻本であり、版式字様共に前刻に似る。補修の個所は未修完本未見の為不詳。題簽角書は「新刻校正」。序目順次は前刻とやや異なり、徐中行序の次にあった目録を引用書目の次に配す。本文巻頭題署程式は前刻に同じ。四周単辺（二三・二×一六・一糎、内に高さ四糎の上層を含む）、無界十二行、行十九字、注小字双行、行十九字、上層標注行七字或は六字、李氏増評頭には墨囲の「増」字を冠す、欄上に行二字或は三字の校語が刻さる（有框）。版心大黒口単黒魚尾、上象鼻に「天明丙午再刊」（巻六七第七・八丁等「寛文壬子年刊」と底本のままに誤刻）、下象鼻に「八尾友春」と陰刻さる。最終葉裏第九行下方に「八尾甚四郎友春梓行」なる刊記があり、後表紙裏に「寛文十二壬子年新刻／天明六丙午年再彫／寛政四壬子年補鐫／広華堂蔵板（大字）／大坂書林 高橋平助 森田伝兵衛 松村九兵衛」なる奥付あり。松村九兵衛は敦賀屋文海堂、森田伝兵衛は井筒屋、高橋平助は塩屋興文堂であろう。雑喉屋・板屋両人所持の素人株の支配人が河内屋嘉市より塩屋平助へ移ったものと思われる。広華堂は雑喉屋或は板屋の堂号か。

〈滋賀大学附属図書館教育学部分館蔵〉 存巻六六―八六、一〇七―一三〇 七冊

空押菊花雷紋繋濃縹色表紙（二六・一×一八・四糎）、題簽幾ど剝落。奥付の「高橋平助」下に押印あれども読めず。「稽古館」（朱長方）、「彦藩／弘道館／蔵書印」（朱長方）、「大津師範学／校書籍縦覧／所蔵書之印」（朱方）の印記あり。

〈大阪府立中之島図書館蔵〉 欠首目 四八冊（332.1 22）

香色艶出表紙（二六×一八・八糎）、第四冊以下は元題簽を存し下方の冊次数は「四」至「四十八」と、第一至三冊は落剝し書題簽を補う。「野筐亭／蔵書記」（朱方）、「大阪師／範学校／書籍印」（朱方）、「府立大阪／書籍館／図書印」（朱方）の印記。

〈神宮文庫蔵〉 二五冊（増四、五丁三ろ2758） 御巫清白氏献納本
空押雲龍紋縹色表紙（二五・六×一八・六糎）、題簽下方冊次数は、「序目録」「一」至「二四」。朱で送仮名等の訂正、首十四巻、欄上に語義等の書入。「陽田津／守氏蔵／書之記」（朱方）、「御巫書蔵」（朱長方）、「昭和二十年九月献納／神宮文庫　御巫清白」（朱長方）、「神宮／文庫」（朱方）の印記あり。
〈京都大学附属図書館蔵〉 二五冊（5 42シ） 谷村文庫
空押花紋雷紋繋濃縹色表紙（二五・七×一八・七糎）。
8ハ後印本
奥付の書林名「高橋平助」を「伊藤七郎兵衛」と控改。控改後の奥付を有する完本は未だ管見に入らず。
〈東北大学附属図書館蔵〉 存巻五―七、一二二―一三〇 二冊（222 113 1-5）
後補縹色布目表紙（二五・四×一八・五糎）。前記同館蔵本（7イ）の補配本である。
8ニ大坂敦賀屋九兵衛等後印本
〈内閣文庫蔵〉 二五冊（279 27）
空押亀甲花紋濃縹色表紙（二五・七×一八・七糎）。後表紙裏に「三都発行書房」として京都銭屋惣四郎・江戸須原屋茂兵衛・大坂敦賀屋九兵衛等計八軒の書肆名を列記せる奥付があり、敦賀屋九兵衛の下に「版」字が刻さる。「昌平坂／学問所」（墨長方）、「安政乙卯」（朱無框）、「大学／蔵書」（朱方）、「大日本／帝国　／図書」（朱方）の印記あり。
〈大阪天満宮蔵〉 二五冊（史1 3）
空押亀甲花紋濃縹色表紙（二五・八×一九糎）。奥附の書肆名末の大坂敦賀屋九兵衛下に「文海／堂記」（白方）の捺印あり。「天満宮御文庫奉／納書籍不許売買」（朱長方）の印記あり。
〈内閣文庫蔵〉 二五冊（279 28）
空押雷紋繋花紋濃縹色表紙（二五・九×一九・二糎）。後表紙裏の奥付は前掲本とは別板で、江戸岡田屋嘉七・京銭屋摠四郎・大坂敦賀屋九兵衛・同彦七等計八軒の三都発行書肆が列記され、両敦賀屋下に「板行」の二字が刻さる。「教部省／文庫印」（朱長方）の印記あり。
敦賀屋彦七は嘉永五（一八五二）年閏二月、同九兵衛手代より別家し、本屋仲間に加入している。(注20)
8ホ京丸屋善兵衛後印本
〈慶應義塾図書館蔵〉 二五冊（2 4 25） 中井龍子寄贈本
空押亀甲繋濃縹色布目表紙（二六・五×一八・八糎）。「平安書肆　山中瑞錦堂　三条通寺町西へ入町　丸屋善兵衛」と記せる奥付を有す。
丸屋善兵衛は、慶應元（一八六五）年九月、本板丸株の内浅井伊予助所持、丸屋支配の四軒之壱軒前（焼株）を八尾板古板無点及び点付株等とともに、代銀七貫五百目で大坂秋田屋太右衛門方へ永代売渡している。(注15)
8ヘ大坂秋田屋太右衛門等後印本
〈滋賀大学附属図書館教育学部分館蔵〉 欠首目・読史総評一巻並短長説二巻、巻六六―一〇六　一八冊
空押菊花雷紋繋濃縹色表紙（二五・四×一八・八糎）。末冊後表

紙裏に「文政七甲申年二月補刻／江都　日本橋南一丁目須原屋茂兵衛／大坂心斎橋通安堂寺町秋田屋太右衛門」なる奥附があるが、印面磨滅せる後刷で恐らくは別書奥附からの流用であろう。「木村／家蔵」（朱長方）、「彦根県／学校／蔵書」（朱長方）、「大津師範学／校書籍縦覧／所蔵之印」（朱方）の印記あり。

〈同蔵〉　二五冊

空押飛雲紋代赭色表紙（二五・八×一八・八糎）。末冊の後表紙と巻末葉との間に江戸須原屋茂兵衛・京都勝村治右衛門・大阪秋田屋太右衛門等計十名の三都発行書林を列記せる奥附があり、更に後表紙裏には前記（8ハ）の「高橋平助」を「伊藤七郎兵衛」と控改せる広華堂蔵板の奥付を有すが、此の奥付は印面甚だ磨滅せる後刷である。

〈京都大学文学部蔵〉　二四冊（文哲中B C 1-9-5）

空押亀甲紋繋濃縹色表紙（二五・五×一八・五糎）。後表紙裏に江戸須原屋茂兵衛・備前片山屋孫兵衛・備中太田屋六蔵・京都丸屋善兵衛・大阪秋田屋太右衛門等計十二軒の発行書肆を列記せる奥付あり。

8ト大阪堺屋新兵衛等後印本

〈内閣文庫蔵〉　二五冊（279 26）

同版二種の取合せ本。第一―三冊は空押亀甲花紋濃縹色表紙（二六・三×一九・四糎）、第四―二五冊は空押雷紋繋濃縹色表紙（二五・五×一八・四糎）。末冊後表紙裏の奥付には江戸須原屋茂兵衛より大阪堺屋新兵衛に至る計六軒の書林名が記さる。「昌平坂／学問所」（墨長方）、「大学／蔵書」（朱方）、「浅草文庫」（朱長方）、「安政乙卯」（朱無框・第一―三冊）、「慶応乙丑」（朱無框・第四冊以下）、「清水／教／諭所」（墨方・第四冊以下）の印記あり。

堺屋新兵衛は文政九（一八二六）年九月、秋田屋太右衛門より別家し本屋仲間に加入、当初秋田屋新兵衛と号した。同一〇（一八二七）年四月、堺屋新兵衛と家号を改めている。(注21)

8チ大阪河内屋茂兵衛等後印本

〈大阪府立中之島図書館蔵〉　二五冊（332.1 22②）

空押亀甲繋濃縹色表紙（二五・五×一八・七糎）、題簽改刻、大題下方に「八尾板／壹（―二十五）」と刻さる。末冊後表紙裏奥付に、京都河内屋藤四郎・江戸須原屋茂兵衛・大阪河内屋茂兵衛等計八軒の三都書林名を列記。「大坂師／範学校／書籍印」（朱方）、「府立大阪／書籍館／図書印」（朱方）の印記あり。

9イ明治一三（一八八〇）年四月大阪松邨九兵衛等覆天明六年刊本　〈八尾版三刻本〉

「明治三刻史記評林　八尾版　幾」なる題簽を有す。封面、「八尾版校正明治十三年第四月三刻／史記評林／浪華　五書房合梓」と題さる。首目順次、巻頭題署程式、版式行格並に天明六年刊本（8）に同じ。四周単辺（二二・三×一六・一糎、内に高さ四糎の上層あり）、返点送り仮名等殆ど前刻と一致する。版心白口単黒魚尾、「史記巻幾（小題）（丁付）八尾友春（陰刻）」。巻末に「八尾甚四郎友春」と刻さる。末冊後表紙裏の奥付に「明治十二年十二月十九日　出版御届／同　十三年　四月　三刻出版」とあり

次行以下大阪豊田宇左衛門・大野木市兵衛・前川善兵衛・柳原喜兵衛・松邨九兵衛の五出版人名及び住所が列記さる。

本版は、字様、訓点等も天明六年刊本（8）をそのまま踏襲せる覆刻本である。尚、八尾版三刻本と言われているが、寛永刊本を初刻とすれば、第四版となる。款式を同じくする延宝二年刊本を初版とみなして「明治三刻」と謳ったのであろう。

〈斯道文庫蔵〉 二五冊（ヒ222 125）

空押行成紋濃縹色表紙（二六×一八・二糎）。「平岡連／文庫印」（朱長方）、「平岡／好文」（白方）、「海／陽」（朱方）の印記あり。

〈大阪天満宮蔵〉 二五冊（史14）

空押行成紋濃縹色表紙（二六×一八・九糎）。巻二第二一葉は補写。「猶興書／院図書」（朱長方）、「螢／雪軒／珍蔵」（朱方）の印記あり。

〈都立中央図書館蔵〉 五〇冊（井1681）

縹色表紙（二六・五×一八・九糎）。

9ロ同九月印本

奥付の第三行に「同　十三年九月十五日別製本御届」とある。

〈内閣文庫蔵〉 五〇冊（279 29）

縹色表紙（二六・四×一八・八糎）。封面題署前掲本に同じくも別版。「太政／官記／録印」（朱方）、「日本／政府／図書」（朱方）の印記あり。

〈都立中央図書館蔵〉 二五冊（和80）

濃縹色表紙（二六×一八・八糎）、題簽下方の「八尾版」の三字なし。「久木／田印」（朱方）の印記あり。

10イ明治一二（一八七九）―一五（一八八二）年東京別所平七刊奥田遵校点本　覆天明六年刊本

空押亀甲花文葡萄色表紙（二六・五×一八・四糎）、題簽は「遵奥田訓点校字史記評林序并総目録　首（一―百二十九之／百三十／終、尾）」と題署さる。第一・一〇・二〇・三〇・三七・四四冊に見返があり、「明治十二年己卯十二月翻刻／校字史記評林／東京同人有志梓」（第一冊）等と題され、左下方に、上部に「本紀全函東京書林」と横書し下に「神田明神下／湯嶋本住町／万青堂島屋／別所平七印」とある朱長方印が鈐さる。扉中央には「同人社／中之印」（朱方）の印が捺さる。首に「新刊史記序」（「明治十二年十二月／東京　島田重礼撰／市河三兼書」）を冠し、以下王世貞・茅坤・徐中行の三原序（小室樵山書、序末の題署体式は八尾版再三刻本同様明凌稚隆原刊本の体式に同じ）、「史記索隠序」、同後序、「補史記序」、「史記正義序」、「史記集解叙」、「史記正義論例」、引用書目、凡例、目録と続き以上を首冊とし、「読史総評」、「短長説上・下」、「史記正義謚法解」、同列国分野、譜系・地理図、姓氏は末冊に置く。第二冊首に補史記があり、本文巻頭「史記評林巻之一（隔五格）呉興凌稚隆輯校温陵李光縉増補」、次行低一格「五帝本紀第一（隔五格）日本　奥田遵校正」と題す。最終尾題は「史記評林巻之一百三十大尾」と。四周単辺（二二・九×一五・二糎、高さ四・一糎の上層を含む）、無界十二行、行十九字、注小字双行、行十九字、上層標注行七字、凌李両氏按語低一格行六字、

欄上に行二字の校語等が刻さる（有框）。句点縦点返点送仮名（上層標注には句点無し）及び旁注附刻、李氏増評頭には墨囲の「増」字を冠す。版心下象鼻黒口単黒魚尾「史記巻幾（小題）（丁付）」、上層部分に「校字訓点」と刻さる。奥附は第九・一九・二九・三六・四三・五〇冊の各冊後表紙裏にあり、末冊奥付は、「明治十三年十一月一日御届列伝七冊下帙 定価金壱円八拾銭」、次に校正人（奥田遵）及び出版人（別所平七）の氏名住所、並に山崎勝蔵以下一二名の発売書肆が列記さる。但し、後印本では首冊及び末冊を除く中間の見返及び奥付は欠落。

見返の右区画の年月は「明治十二年十二月」（第一冊）、「明治十五年一月」（第二〇冊）、「明治十三年六月」（第三〇冊）、「明治十三年十二月」（第三七冊）、「明治十四年五月」（第四四冊）とあり（第一〇冊見返には年月の記載なし）、本版が、先ず明治十二年十二月に首より巻一〇に至る本紀部分九冊を、次に十三年六月より十四年五月にかけて巻六一至一三〇の列伝部分を三次に分けて、巻三一至六〇の世家は十五年一月に刊行されたことが明瞭で、従来巻末の奥付のみに依り明治十三年刊とされているが、明治十二年より十五年にかけての刊行と改めるべきである。

「史記評林凡例」末に「史記世乏二善本一索隠正義等文字頗多二誤謬一今据二皆川淇園先生捩柁中井履軒先生雕題一以訂二其訛一附二鄙見於其間一併掲二之欄上一但以二紙幅有レ限不二復一一識別一他日当下作二一書一以審ニ之 明治十二年十二月 長尾後学 龍湫奥田遵識」とある如く、欄上標注は遷史捩柁、史記雕題の抄録に校者の按語を交えたものである。

本版は八尾版天明六年刊本（8）と字様、行格版式等ほぼ類似し、その粗なる覆刻本と言えるが、返点送り仮名振仮名等は旧本を改め、やや校点者の趣意が加わっている。

〈国立国会図書館蔵〉 五〇冊（1603）

〈慶応義塾図書館蔵〉 五〇冊（1950） 加賀美繁子寄贈本

第一〇・二〇・三〇・三七・四四冊の見返及び、第九・一九・二九・三六・四三冊の奥付無し。「加賀美／蔵書印」（朱長方）、「加賀美光賢（左右に「東京芝区三田町／壱丁目卅五番地」と）」（朱長方）の印記あり。

〈内閣文庫蔵〉 五〇冊（27934）

第一冊見返の左区画「十二月」下の「翻刻」の二字がない。「秘閣／図書／之章」（朱方）、「太政／官記／録印」（朱方）、「太政官／文庫」（朱方）、「日本／政府／図書」（朱方）の印記あり。

10ロ 明治二五（一八九二）年修文館印本

題簽、「校字再版史記評林 奥田遵校字一（一～五十止）」と題す。第一・一一・二一・三一・四一冊の見返に、中央に「校字再版史記評林」、右区画上部に「龍門司馬遷 著／呉興凌稚隆輯校／温陵李光縉増補」、下方に「島田重礼先生序／奥田遵先生校字」、左区画に「発行書肆 修文館蔵版」と題さる。第一〇・二〇・三〇・四〇・五〇冊末葉（版心上象鼻題「校字訓点史記」）に奥付があり、「明治十二年十一月四日御届 同廿五年三月七日求版 同 年三月廿日再版」、以下校正者名及び発行兼印刷者名（上総の能勢嘉左衛門より三州の高須広次に至る六人、各人名下に捺印あり）が、その裏に上総東金

盛松館多田屋本店より東京松柏堂出雲寺万次郎に至る十名の専売書肆名が列記さる。更に、末冊の後表紙に大阪柳原喜兵衛より函館魁文社に至る各地売捌書肆計三八名が列ねらる。

〈都立中央図書館蔵〉 五〇冊（特6605）

濃縹色表紙（二六・三×一八・三糎）。

○

11イ 寛文一三（一六七三）年京積徳堂刊本〈紅屋版初刻本〉

題簽は、「新刊／校正」と角書があり「史記評林」と題し、下方に各冊所収の巻次を刻す（末冊「巻一百廿九／之三十大尾」）。首に「叙ニ李生増補史記評林ニ」（第二行低五格、「黄洪憲拝言」と題し、末に「史記評林首叙」と）を冠し（此の序文を有すること、紅屋版の一特徴であるが、其の出処不明）、次に王世貞叙以下前記八尾版諸版と同内容の首目を有す。目録は天明六年刊本（8）に同じく引用書目の次に配さる。なお、茅坤・徐中行両序末の題署程式は凌氏原刊本（1）に倣い、明刊李光縉増補本（5）・寛永一三年八尾助左衛門尉刊本（6）とは異なる。「史記正義序」尾題前の熊体忠・劉朝薇の原刊記を存す。本文巻頭「史記評林巻之一（隔八格）呉興凌稚隆輯校 温陵李光縉増補」、第二行低一格「五帝本紀第一」と題す。四周単辺（二四・一×一六・四糎、高さ三・九糎の上層を含む）、無界十二行、行廿二乃至廿四字、注小字双行、上層標注行六乃至七字、凌・李氏按語は低一格行五乃至六字。李氏増評頭には墨囲の「増」字を冠す。三注評注並に返点縦点送仮名、正文には更に句点声点旁注、時に振仮名が附刻さる。版心白口単黒魚尾（まれに双黒魚尾の葉あり）、「史記巻幾（小題）（丁付）」、後表紙裏に「寛文十三癸丑歳二月吉辰／書林 雒阪西御門前 積徳堂梓行」の刊記がある。

本版の開板は八尾版再刻本（7）とほぼ同時期に進められ、この方がわずかに早く刻成した。八尾版再刻巻四五末の刊記が寛文一三年仲夏五月であるから、先立つこと三月である。ともに八尾版初刻本（6）に依り翻刻され底本の誤脱を訂正するところが多く、文字の異同、内容からみても極めて近似性が強いとされる（水沢利忠「史記の文献学的研究」）。

積徳堂は寛文延宝の間に大倭廿四考、和名類聚抄、円機活法韻学、円機活法詩韻全書等を刊行せる京烏丸の書肆。

〈京都大学人文科学研究所蔵〉 五〇冊（史I88A）

香色表紙（二七・五×一九・三糎）。「光台院蔵」（朱長方・醍醐寺）の印記あり。

〈尊経閣文庫蔵〉 五〇冊

香色表紙（二七・五×一九・六糎）。「怡斎／図書」（朱方）の印記あり。

鹿児島大学附属図書館蔵玉里文庫目録著録本 二五冊（3229、欠巻六一―六七）があるが未見。

11ロ 後印本

紅屋版初刻本で刊記を有するものは極めて尠く、ごく早印のものに限られる。以下はその刊記を欠く後印本である。

〈大阪大学附属図書館蔵〉 巻六一―六九（第一六冊）配明和七年世裕堂刊本 二五冊（2-01-03 史記 岡SHI）岡田文庫

褐色表紙（二七・五×一九・五糎）、題簽様式は前掲二本に同

じくも下方の巻次数なし。巻一〇四至一三〇（第二一至二五冊）はやや後出印本で補配された取り合せ本である。「山東／氏蔵」（朱方）、「小高／文庫」（朱円、第一六冊のみ）の印記あり。

〈慶應義塾図書館蔵〉 二五冊（179 72 25） 北野元一寄贈書

茶色表紙（二六・三×一九糎）、題簽同前。巻四四以降、一部に朱引朱圏点、欄上或は上層余白に朱筆の校字等の書入あり。また、処々、朱で訓点が訂正されている。「北野／蔵書」（朱方）の印記。

〈岩瀬文庫蔵〉 欠補史記一巻、巻一―四 二四冊（151 32） 近藤房夫寄贈書

空押市松紋縹色表紙（二六・一×一八・八糎）、題簽同前、まま朱圏点、墨筆標注書入あり。「中観坊／興雲蔵」（朱長方）の印記あり。

〈内閣文庫蔵〉 欠目録、巻七 二五冊（279 24）

後補空押卍つなぎ雲龍紋黄色表紙（二六×一八・六糎）、題簽は前掲諸本と異なり、上部区画の角書は「新刻校正」と一列に刻さる。朱で訓点を訂正、また上層余白にまま校字書入あり。「司法省／図書記」（朱長方）、「日本／政府／図書」（朱方）の印記あり。

（追記7）

〈大阪大学附属図書館蔵〉 二五冊（2-01.03 史記 岡 SHI）

空押雷紋地花紋暗黄緑色表紙（二六・三×一九・一糎）、題簽改刻、角書中央に縦線が入り「新刊／校正」と、大題字様も前掲諸本と異なる。目録外題が朱書さる。印面漫滅せる後刷本。

〈京都大学附属図書館蔵〉 二五冊（42シ2）

縹色表紙（二六・一×一九糎）、題簽、前記大阪大学附属図書館儲蔵本に同じ。朱墨の句点圏点、朱引墨線等の書入あり。「百々復太郎寄贈」の朱長方印が鈐さる。

積徳堂刊行の本版がなぜに紅屋板の呼称を得たものか明らかでない。元禄九年刊増益書籍目録大全、同宝永六年増修本、同正徳五年修本に史記評林新版が著録され、「評点付二板アリ」と注があり、八尾、小紅ヤの両名が標記されている。また、元禄太平記巻之一京と大坂に本替の沙汰に「中頃史記―活法の争ひにて、七屋はおとろえ、少紅はすたりぬ」とみえ、七屋は八尾、少紅は紅屋であろう。活法は円機活法で、菊池耕斎訓点円機活法詩学二四巻が寛文一三（一六七三）年に八尾甚四郎友春より、同点円機活法韻学一四巻が延宝元（一六七三）年に積徳堂より、ほぼ時と所とを同じくして刊行されている。積徳堂が紅屋と称した明証は無く、元禄以降、京堀川の書肆に梁文堂小紅屋喜兵衛（柳原氏）の名があることから、紅屋とは或はこの梁文堂をいい、積徳堂の斜陽により、其の蔵板が小紅屋に移ったものか。尚、岡本保孝の史記伝本考、紅屋板の項に「縫心ニ紅屋トアリ」として「孝云寛文十三年元刻ノ本今アリヤ、亡友内山孝之助此本ヲ蔵ス、評林ニハ点ナシ、五七年以前祝融氏ノ災ニカヽリテ、烏有トナル」[注22]とあること、水沢博士が既に指摘されているが、かかる伝本を儲蔵するところを聞かない。

12イ 明和七（一七七〇）年京世裕堂覆寛文一三年積徳堂刊本 〈紅屋版再刻本〉

題簽、上方小区画に「校正／再板」と角書、「史記評林」と題し、その下に「読史総評／短長説」（第一冊）、「序目録」（第二冊）、「巻之一／之七」（第三冊）、「巻百廿九／之百三十／大尾」（第五〇冊）等と巻次が刻さる。首目序次内容は前記寛文一三刊本（11）にほぼ同様であるが、目録は「史記正義論例」と同論法解との間に配さる。本文巻頭題署程式は前掲寛文一三年刊本に同じ。左右双辺（二三・六×一六・一糎、高さ二・七糎の上層を含む）、有界十二行、行廿二字乃至廿四字、注小字双行、上層標注行五字、凌李両氏按語低一格行四字、欄上に行二字の校字あり。返点縦点送り仮名、正文には更に句点を附刻。まれに傍注があるが、寛文十三年刊本に比し大半は省刻されている。版心白口単黒魚尾「史記巻幾（小題）（丁付）」、巻二三第一葉版心下象鼻に「芥氏句読」と刻さる。末葉に「寛文十三年癸丑二月元刻／明和七年庚寅三月再刻／京都　書肆　世裕堂蔵版」なる刊記がある。

本版は、標注を除く本文及び序目は寛文十三年積徳堂刊本の覆刻であるが、訓点は少しく異なり大率簡略で、振仮名は殆どみられない。加点者芥氏は未詳。或は芥川丹丘か。

〈蓬左文庫蔵〉五〇冊（6014）

白色表紙（二八・八×一九・四糎）。「張府内／庫図書」（朱長方）の印記あり。

尚、本帙の如き五〇冊本はまれで、見存諸帙の殆どは二五冊本で、題簽書名下には、「序目録／読史総評／短長説」（第一冊）、第二冊以下は一から廿四と冊次数のみが刻さる。

〈大阪大学附属図書館蔵〉二五冊（2-01-03 史記 SHI 懐徳堂）大江倫子寄贈本

香色表紙（二六・九×一八・六糎）。「万里文庫」（朱長方）、「平安大／江氏蔵」（朱長方）の印記あり。

〈大阪府立中之島図書館蔵〉二五冊（332 180）

香色表紙（二七・二×一八・四糎）。序目順次、目録を引用書目後、読史総評前に配す（以下の諸帙も同様）。附箋に語釈等の墨筆書入あり。「西邨／柳攻」（朱方）の印記あり。

〈神宮文庫蔵〉二五冊（五乙二い1815）

香色艶出表紙（二五・九×一八・三糎）、右肩に目録外題が墨書（第二三冊は朱書）さる。まれに朱墨の校語等の書入がある。「林崎文庫」（朱長方）、「林崎／文庫」（朱長方）の印記あり。第一冊見返に「謹以漢大史公之所撰史記一部奉納林崎庫中比以古人蔵／書於名山而伝不朽之意伏願我等不肖子孫以此余慶／久々昌々永仰　神徳斉日月輝乎宇宙者也次者映雪／聚螢之書乏挾書之資者効韋編三絶之古見?免／蠹魚之害哉／天明壬寅歳夏六月」と奉納文が墨書され、村惟倫、吉恒易、岩嘉言、村以荘四名の署名並に捺印がある。

〈豊橋市立図書館蔵〉二五冊（222 6）

香色艶出表紙（二七・二×一八・四糎）。巻四六（田敬仲完世家）、四七（孔子世家）に、祖庭広記・博物志等諸書より引抄せる書入がある。「参河国羽田／八幡宮文庫」（朱長方）、「羽田文庫」（朱長方）の印記あり。（追記8）

12ロ 天明九（一七八九）年大坂柳原喜兵衛等印本

巻末に「寛文十三年癸丑二月元刻／明和七年庚寅三月再刻／

天明九年己酉正月求版／浪華書林

裁配帳二番（大坂本屋仲間記録第九巻所収）史記一件出入の条に「史記評林　紅屋板　板元　敦賀屋九兵衛／河内屋喜兵衛／糸屋市兵衛　寛政元酉正月京都ヨリ求板」と記され、天明九年正月二五日、寛政元年と改元されているから、本奥付と符合する。敦賀屋は松村、河内屋は柳原氏であり、糸屋は梅月氏であろう。尚、糸屋所持の板木は、文化八（一八一一）年一〇月、酢屋六左衛門が買受けている。(注23)

〈都立中央図書館蔵〉二五冊（特6604）

空押雷文地花卉文縹色表紙（二六・二×一八・三糎）。朱句点朱引、欄上に八尾板、二十一史本、張守約本、嵯峨本等との朱墨校合書入あり。蜂屋椎園手校か。「蜂屋蔵」（朱長方）、「椎園図書」（朱長方）の印記がある。

〈宮内庁書陵部蔵〉二五冊（204 121）

空押菱型菊花紋縹色表紙（二五・八×一八・五糎）。朱句点圏点の書入あり。「古賀氏／蔵書章」（朱長方）、「京都／帝国大学／図書之印」（朱方）の印記がある。

〈慶応義塾図書館蔵〉二五冊（179 155 25）

香色表紙（二六・一×一八・六糎）、題簽様式、第七冊のみ異なり、「新版考正」の角書がある。「蘆河／翼斎」（朱方）の印記あり。

〈内閣文庫蔵〉欠巻八―一二　二四冊（279 30）

空押双円繋褐色表紙（二五・八×一八・四糎）。一部に朱引あり。「昌平坂／学問所」（墨長方）、「文化癸酉」、「浅草文庫」（朱長方）、「大日本／帝国／図書印」（朱方）の印記がある。

12ハ　大阪河内屋喜兵衛等後印本

〈慶応義塾図書館蔵〉二五冊（25 12 25）

空押雷文繋地花卉文縹色表紙（二五・八×一八・七糎）。巻末に「積玉圃蔵書目録」（版心題）三丁を附綴、各葉首に「浪華書房柳原積玉圃蔵書目録心斎橋通北久太郎町河内屋喜兵衛」と題さる。末冊後表紙裏に奥付があり、江戸須原屋茂兵衛・京吉野屋仁兵衛・尾州永楽屋東四郎・大阪河内屋喜兵衛等計一三名の発行書肆を記し、河内屋喜兵衛下に「板」字が刻さる。「積玉圃蔵書目録」所掲書のうち左繦全十六冊は嘉永七（一八五四）年刊であるから、本帙はそれ以後の印本と見做し得る。「佐々木氏／蔵書印」（朱方）、「学校之印」（朱長方）の印記あり。

〈内閣文庫蔵〉二五冊（279 25）

空押波紋濃縹色布目表紙（二六・三×一八・七糎）。奥付は前書と異なり、京都吉野屋仁兵衛より大阪河内屋喜兵衛板に至る一三名の発行書肆名が記され、書肆名ほとんど前書に同じくも、江戸須原屋伊八を欠き、尾州万屋東平が加わっている。「大政宮／文庫」（朱方）、「日本／政府／図書」（朱方）、「宮内省／図書印」（朱方・消印）の印記がある。

12ニ　明治印本

〈大阪府立中之島図書館蔵〉二五冊（日朝332.1 8）

空押卍繋黄色布目表紙（二六×一八・五糎）。末冊後表紙裏の奥付に讃州高松本屋茂兵衛より大坂敦賀屋九兵衛に至る十二の発行書肆名を記し、敦賀屋九兵衛下に「梓」字が刻さる。書肆

名中、須原屋茂兵衛等に東京と、銭屋惣四郎等に西京と明記され、本帙は漫漶甚しき明治に入って後の後刷本である。

○明治期刊行諸版その他

13イ 鶴牧藩版　明治二（一八六九）年刊田中篤実等校本

題簽、「増訂史記評林　一（―五十）」と題す。「明治二己巳年翻刻／増訂史記評林／鶴牧修来館蔵版」なる封面を有し、「蔵版」字下に「修来／館章」の朱方印が鈐さる。首に「新刊史記評林序」（「明治二年己巳歳六／月／　副知学事兼侍読／　秋月種樹撰／（印）（印）／　行政官録事金井之恭謹書／（印）（印）」）を冠し、王世貞「史記評林叙」以下「史記評林引用書目」までを第一冊、目録・「読史総評」・「短長説」を第二冊に収め、第三冊首に「補史記」を配す。紅屋版の首に冠せる黄洪憲「叙李生増補史記評林」は無い。本文巻頭「史記評林巻之一（隔五格）」（呉興凌稚隆輯校／温陵李光縉増補）　五帝本紀第一」と題し、尾題は「史記評林巻之幾（終）」、各巻尾題下に「田中篤実／本多政辰同校」（左側の氏名は各巻異なる）と同校者名を署す。左右双辺（一九・五×一五・一糎）、高さ三・九糎の上層あり。有界十一行、行十九字、注小字双行、行十九字。上層標注行七字、凌李両氏按語低一格行六字。版心白口単黒魚尾「増訂史記評林　巻幾（小題）（丁付）」、下象鼻に「修来館蔵」と。句点返点、正文には送り仮名・傍注附刻。李光縉増評には頭に墨囲の「増」字を冠す。巻末最終葉裏の奥附に、「官許　明治二己巳年正月十三日／発行書林　玉山堂山城（東京日本橋通二丁目）屋佐兵衛」とあり、中央上方に「鶴牧／修来館／蔵版」の朱方大印が、山城屋佐兵衛下に「東京書／舗玉山／堂之記」なる朱方印が鈐さる。

首の「新刊史記評林序」に「鶴牧藩主水野忠順命田中蔦実・豊田一貫等、校正刊刻者。蓋字画之楷正、校勘之精到、較之従前坊刊諸本、太完善矣。余以謭劣、忝備員今皇帝侍読、嚮与三条右府謀、進読史記、以世無善本為憾、欲別刊一本以具御前。適忠順蒙官准、此本刊始成、将献呈一本、乞序於余。」と本版校刊の経緯が記されている。

〈内閣文庫蔵〉　五〇冊（279 33）

空押卍繋緑色布目表紙（二九・四×二〇・五糎）。「浅草文庫」（朱長方）、「日本／政府／図書」（朱方）、「大学校／図書／之印」（朱方）の印記あり。

〈同蔵〉　五〇冊（279 32）

表紙同前。「浅草文庫」（朱長方）、「大学校／図書／之印」（朱方）、「大日本／帝国／図書印」（朱方）の印記あり。本帙は昭和四十七年汲古書院刊和刻本正史史記の底本である。

以下の諸帙は後表紙裏に彫工名及び、須原屋茂兵衛より上州屋惣七に至る九名の東京発弘書林を記せる奥附を有す。

〈岩瀬文庫蔵〉　特大五〇冊（45 38）

空押唐草文黄色布目表紙（三九・四×二〇・八糎）。特大特装本。「張南半田／三浦氏記」（朱長円）の印記あり。

〈無窮会図書館蔵〉　五〇冊（真軒526）

空押唐草文緑色布目表紙（二九・一×二〇糎）。「阪井／氏蔵」（朱方）、「真軒／蔵書」（朱長方）の印記あり。

〈京都大学人文科学研究所蔵〉 五〇冊（史134）
空押唐草文黄色布目表紙（二六・七×一八・八糎）。「三春／文庫」（朱方）の印記あり。
〈天理図書館蔵〉 五〇冊（古123 1）
空押唐草文黄色布目表紙（二六・七×一九糎）。「古義堂」（朱長方）の印記あり。
〈東北大学附属図書館蔵〉 五〇冊（A丙2-3 24）
空押唐草文黄色布目表紙（二六・七×一八・九糎）。「□□蔵書」（朱長方）、「田岡嶺雲遺書／田岡良一氏寄贈」（朱長方）の印記あり。（追記9）
〈斯道文庫蔵〉 欠巻一一二―一一六 四九冊（222ト4 49）
空押唐草文黄色布目表紙（二六・六×一八・四糎）。
〈慶應義塾図書館蔵〉 合三冊（H772 3） 星文庫
薄葉紙本。後補茶色布表紙（二六×一八糎）、題簽題署程式は前記諸帙に同じくも字様異なり別版である。封面欠落。末葉刊記左下方に「山岸豊寿郎／営業店検閲」（朱長方）の鈐印あり。「星文／庫印」（朱長円）の印記。

13ロ 後印本

以下の諸帙は首の「新刊史記評林序」三葉が改刻され、同文ながら、撰者及び書家の官銜を「従四位守大学大監兼侍／読大蔵朝臣種樹撰」、「従七位守少史源朝臣／之恭謹書」と、撰序月を「明治二年己巳歳十月」と改める。
〈斯道文庫蔵〉 五〇冊（222ト7 50）
空押唐草文黄色布目表紙（二五・三×一七・九糎）。
〈慶應義塾図書館蔵〉 五〇冊（62 1 50）
表紙同前。「江守／蔵書」（朱方）、「江守善六氏／寄贈図書」（朱長方）、「明治三十八年／東京帝国大学／図書館印之証」（緑長方）、「東京大学／図書之印」（朱方）の印記あり。
〈東北大学附属図書館蔵〉 五〇冊（222 113）
表紙同前。「西脇／蔵書」（朱方）、「第二高／等学／校図書」の印記あり。
〈慶應義塾図書館蔵〉 五〇冊（H460 50） 星文庫
表紙同前。巻末最終葉裏の奥付中央の鈐印は上掲諸帙と異なり「修来館／蔵版」の印文で方三糎のやや小振りのものである。「星氏之印」（朱長方）の印記あり。
〈大阪大学附属図書館蔵〉 五〇冊（2-01.03 史記 SHI 懐徳堂）
表紙同前。「懐徳堂／図書記」（朱方）、「碩園記念文庫」（朱長方）の印記あり。
〈東洋文庫蔵〉 一〇冊（II 1 815）
薄葉紙本。茶色布表紙（二六×一八・五糎）、題簽異板、「増訂史記評林 一（―十）」と題さる。

13ハ 修来館水野忠順蔵版後印本

最終葉裏及び後表紙裏の奥付の一部を改修。最終葉奥付は第一行の「官許明治二己巳年正月十三日」はもとのままだが、その左を「蔵版主修来館 東京府華族 水野忠順 東京府本所区松井町一丁目二十六番地／発行書林 山城屋 東京府平民 稲田佐兵衛 東京府日本橋区通二町目二十番地」と改刻、水野忠順下に「修来館／蔵版」（朱

方）の印、稲田佐兵衛下に「玉山／書房」（朱方）の印が捺さる。後表紙裏の奥付は、下半部分の書林名を改刻して「須原屋北畠茂兵衛」より「山城屋　稲田源吉」に到る八名を列記する。〈京都大学附属図書館蔵〉　二五冊（42シ3）　水野忠宝寄贈本　空押唐草紋黄色布目表紙（二六・四×一八・一糎）。

14明治一四（一八八一）年大阪岡島真七等刊藤沢南岳校点本

「校訂史記評林　藤沢南岳訓点　一（―五十）」と題署せる題簽及び目録題簽がある。見返に「藤沢南岳訓点／校訂史記評林／浪華同盟書楼蔵版」とあり、上辺上に左から右へ「明治十四年五月刻成」と刻さる。首に「序」（「明治庚辰八月／　薩摩　重野安繹撰」）、「校訂史記評林序」（「明治十三年庚辰天長節識於東京／擐碧楼南摩綱紀／　桂州伊藤信平書」）、「序」（「明治十三年冬十一月／　省軒亀谷行撰／　万菴三兼書」）並に「自叙」（「明治辛巳立夏前三日／　南岳藤沢恒撰」）を冠し、末に「大清葉松石跋」（版心題）（「光緒七年夏日嘉興葉煒松石識／於西京之寄雲楼」）がある。「自叙」の次に王世貞叙、以下短長説に至る首目内容は上掲八尾板等諸版に同じで黄洪憲の序は無く、茅坤・徐中行二序末の題署は明刊李光縉増補本（5）及び八尾板初刻本（6）に同じである。譜系図及び地理図は洋紙銅板刷りで他の諸版とは体例を異にし、地図は「五帝夏商地図」「周国都地図」「春秋列国地図」「戦国七雄地図」「秦三十六郡地図」「漢州郡地図」「清全国地図」の計見開七図で多色刷である。引用書目までを第一冊とし、目録は第二冊首読史総評の前に配さる。第三冊首補史記は「校訂史記評林補」と題し、本文巻頭「校訂史記評林巻之一／（低七格）明　呉興凌　稚隆輯校／（低一〇格）温陵李　光縉増補／（低七格）大日本讃岐藤沢南岳校訂」と題す。四周単辺（一六×一〇・二糎、高さ三糎の上層を含む）、有界十一行、行廿字、注小字双行廿字。上層標注行七字、凌李両氏按語低一格行六字。李氏増評頭には墨囲の「増」字を冠す。上層或は欄上に南岳の校語等が有框の「校」字を冠して刻さる（上層行七字、欄上行二字有框）。句点返点附刻、正文には送仮名・傍注あり。版心白口単黒魚尾「校訂史記評林　巻之幾（小題）（丁付）」。毎巻尾題前一行に「門生湧川徴笠井静仝校」（巻一）等と同校者名（各巻異なる）あり。巻末に奥付一葉を附す（版心題「校訂史記評林」）。「明治十三年五月二十八日出版御届／同　十四年五月（隔四格）刻成」とあり、訓点人（藤沢南岳）、出版人（岡島真七・梅原亀七・森本太助・柳原喜兵衛・三木美記・前川源七郎・中川勘助・岡島幸治郎）の氏名住所が記さる。

自序に「余平素喜読此書、以願平昔躬所践履、多所感発、於是一読一校、并録所聞于先君子与先輩諸説以自娯焉、頃日書肆岡島氏乞以上梓、巻已浩博亦不訾、氏奮乞不已、乃出付之（略）一年而刻成」と刊行に至る経緯が記され、また南摩序に、「版本行於世者、至数十種之多、皆未免魯魚之差文字之異同、学者病焉、頃東畩子南岳参照諸本校正之、且折衷諸家註釈著此編、名曰校訂史記評林、抑余聞之、節斎事東畩猶師、屢往来其門」とある如く、南岳の校注は、藤沢東畩・森田節斎・中井履軒・

王鳴盛・呉斉賢等諸家の評説を抄録し、殊に父東畝と親交のあった節斎の「太史公序賛蠡測」を多く引用する。

藤沢南岳、天保一三（一四八二）年東畝の長子として生まる。讃岐の人、名は恒、字は君成、盤橋と号し、別に、醒狂・七香斎主人・九々山人・香翁等とも号した。南岳は高松藩主よりの賜号。幕末明治期の儒学者で、高松藩学講道館督学となり、明治六年大阪に出て、父東畝の創設せる泊園書院を再興した。大正九（一九二〇）年歿。

〈大阪天満宮蔵〉 欠巻五〇―五五　中四九冊（史1 5）

黄色布目表紙（一八・四×一二・八糎）。「天満菅廟御文庫奉納／書籍標印不許売買」（朱長方）の印記あり。

〈国立国会図書館蔵〉 中五〇冊（186 23）

黄色布目表紙（一八・三×一二・七糎）。見返右方一部破損。葉松石の跋無く、奥付は本文末葉裏から後表紙裏にかけて刷印さる。

〈京都大学附属図書館蔵〉 中一〇冊（43シ2）

薄葉紙本。茶色絹表紙（一八・八×一三・一糎）、題簽は前掲二帙とは別板、「校訂史記評林藤沢南岳訓点一（―十）」と題さる。「故六止斎金原安修記念金原清左衛門寄贈」（緑長方）の印記あり。

15明治一四（一八八一）年大阪修道館刊鉛印本

修道館と空押せる縹色表紙、題簽、「増訂史記評林　大郷穆 伊地知貞馨 点　巻首乾（首坤・一―二十五）と題す。封面に「明治十四年刊行／増訂史記評林／　修道館」と題さる。首に「修道館本史記評林序」（「明治辛巳十二月一等編修官従五位重野安繹撰」）を冠し、「史記評林叙」（王世貞）以下首目内容は上掲八尾板諸本に同じで黄洪憲の叙は無く、引用書目までを首冊とし、目録は第二冊首、読史総評の前に配さる。尚、茅坤・徐中行序末の題署程式は明版李光縉増補本（5）、寛永一三年刊八尾版初刻本（6）に同じ。本文巻頭、「史記評林巻之一（隔一〇格）呉興凌稚隆輯校 温陵李光縉増補」、第二行低一格「五帝本紀第一（隔一〇格）大郷穆 伊地知貞馨 点」と題す。四周双辺（二四×一五・八糎、高さ二・八糎の上層を含む）、無界、十四行、行廿二字、注小字双行、行卅七字、上層標注行七字、凌李両氏按語低一格行六字。版心白口魚尾無し、「増訂史記評林○巻幾（小題）（丁付）○修道館」。句点返点送仮名付印（但、上層評注は返点のみ）、原有の旁注は無い。李氏増評頭には墨囲の「増」字を冠す。最終葉裏に「明治十四年十月／刊行／大阪修道館」なる刊記がある。首の重野安繹の序に「山田栄造與同志胥謀、以聚珍印行諸書、普恵後生。命曰修道館本。首刻史記評林、俾予序之。坊本評林、有紅屋八尾諸版、大抵疎謬難読、而八尾版較佳。今此本依仿之、訂文字正訓点、非復旧版之比。且廉其価直、使窮郷寒生易購獲。其益于世大矣」と。

本版は八尾板に倣いながら、文字訓点にやや改正を加えてある。鉛印本であるが、首の重野安繹序四葉及び、世系表・地理図は整版である。

伊地知貞馨、通称は徳之助・又十郎・仲左衛門・次郎・小太郎・壮之丞、恒庵と号す。幕末維新時の国学者。文政九（一八二六）年薩摩藩士堀右衛門が三男として生まる。堀仲佐衛門と

称したが、のち伊地知貞馨と改めた。維新の際には堀小太郎と変名し国事に奔走する。鹿児島藩小参事、明治元年、参政に任じ藩政改音に従う。四年以後琉球国制度変革のことに与り、琉球藩在勤となる。一四年修史局編修に任ず。沖縄志五巻の著述がある。明治二〇（一八八七）年四月一五日歿、享年六十二歳。

〈京都大学文学部蔵〉 大二七冊（哲文中 BIC 9-6）

〈京都府立総合資料館蔵〉 大二七冊（和916 52）

「京都／府立／図書／館印」（朱横長方）の印記あり。

〈大阪府立中之島図書館蔵〉 大二七冊（332.1 26）

〈都立中央図書館蔵〉 大二七冊（222 MW 21） 諸橋文庫

〈東北大学附属図書館蔵〉 大二七冊（狩3 5961 27） 狩野文庫

「狩野氏図書記」（朱長方）、「荒井泰治氏ノ寄附金ヲ／以テ購入セル文学博士／狩野亨吉氏旧蔵書」（朱長方）の印記あり。

〈斯道文庫蔵〉 欠巻四〇―四三、九七―一〇五、一一二―一二四） 大二三冊（222 ト5 23）

「田中氏／蔵書印」（朱長方）の印記あり。

〈内閣文庫蔵〉 大二七冊（279 35）

末冊後表紙裏に、「明治十四年六月廿八日出版届／同 十五年一月出版」とあり、以下訓点者、出版者名を銘記せる奥附がある。「出版届」下方に「定価金六円」と。「大政／官記／録印」（朱方）、「日本／政府／図書」（朱方）の印記あり。

16明治一四（一八八一）年東京印刷会社刊鉛印本

空押卍つなぎ黄色布目表紙（一八・八×一二・八糎）、「明治新刻史記評林 巻之一（―五十）」の題簽がある。封面、「明治新刻／史記評林／東京印刷会社版」と題さる。序目内容は王世貞叙より短長説に至るまで上掲八尾板初・再・三刻本等に同じ。但し、茅・徐両序末の題署体式は明板李光縉増補本（5）・寛永一三年八尾板初刷本（6）の体式に同じく、目録は第一冊末、引用書目後にあり、第二冊に読史総評及び短長説二巻を収め、補史記一巻は第三冊首に配さる。本文巻頭題署体式は「史記評林巻之一（隔五格）呉興凌稚隆輯校 温陵李光縉増補」、第二行低一格「五帝本紀第一」と題す。四周単辺（一五・八×一〇・四糎、高さ二・九糎の上層を含む）、無界、十二行、行十八字、注小字双行、行廿三字、上層標注行六字、凌李両氏按語低一格行五字、李氏増評頭には墨囲の「増」字を冠す。句点返点送仮名付刻（標注は返点のみ）。版心白口単黒魚尾、「史記巻幾 （小題）（丁付）」。第一〇・二〇・三〇・四〇・五〇冊末葉に奥附があり、「明治十四年十月七日出版御届／訓点兼出版人 千葉県平民 鈴木義宗 東京々橋区弥左衛門町一番地」と。

〈国立国会図書館蔵〉 中五〇冊（186 30）

〈内閣文庫蔵〉 欠首至巻一、巻八・九、三一―六〇 中三六冊（279 37）

「太政／官記／録印」（朱方）、「日本／政府／図書」（朱方）の印記がある。

〈都立中央図書館蔵〉 中五〇冊（特6606）

奥付無し。巻一二尾題下に「製本師高嶋銑蔵」の鈐印（朱長方）。「停春／楼図／書章」（白方）、「塚越文庫」（朱長方）の印

記あり。

〈同蔵〉 中五〇冊（特6607） 清水文庫

17イ補標史記評林 明治一六（一八八三）―一八（一八八五）年東京報告社刊鉛印本

題簽、「補標史記評林 一（―二十五）」と題署、目録題簽を付す。封面には「明治十六年六月新刊／補標史記評林／東京 報告社蔵版」と題さる。首に「新刊史記序」（「明治十六年六月／東京 島田重礼撰／（印）（印）／河邨靖書（印）」、「史記補標序」（「明治十六年六月中浣／阿波 岡本監輔撰／（印）（印）」）の二序を冠し、王世貞叙以下の首目内容は上掲八尾板諸本等に同じく（黄洪憲の叙は無い）、短長説までを第一冊に収める。茅坤・徐中行両序末の題署は明刊李光縉増補本（5）、寛永一三年刊八尾版初刻本（6）の体式に拠り、目録は引用書目と読史総評との間に配さる。第二冊首に「補標補史記」を配し、本文巻頭「補標史記評林巻之一」第二・三行低一二格に「明 呉興温陵 稚隆輯校 李光縉増補」、第四行低一二格「日本 阿波 有井範平補標」、第五行低一格「五帝本紀第一」と題す。四周双辺（二一・六×一五・一糎、高さ二・九糎の上層を含む）、上欄上に更に、高さ一・八糎の層格を設け有井氏の補評並に按語が標記さる。有界、十三行、行廿四字、注小字双行、行卅三字、上層標注行八字、凌李両氏按語低一格行七字、層格の有井増評並按語行五字。句点圏点返点送仮名及び傍注あり（割注は句点返点、標注は句点のみ）。版心白口単黒魚尾、「補標 史記評林巻幾（小題）（丁付）」。第四・八・一二・一六・二〇冊の後表紙裏及び第二五冊の末三葉に奥付がある。末冊第二五冊の奥付は第一葉表に「明治十六年四月廿日版権免許／仝 十八年七月六日 出版」とあり、補標者・出版人・印刷所・発売所名が記され、裏葉より二葉半に亘って「報告堂出版書籍販売所」が列載されている。出版年月日は各奥付により異なり、第四冊は「明治十六年六月三十日出版」と、第八冊は同十月、第一二冊は同十七年四月八日、第一六冊は同八月廿七日、第二〇冊は同十二月廿七日出版とあり、本版は明治十六年六月より、十八年七月にかけ二ケ年に亘って順次行刊されたことが知られる。

首の岡本監輔「史記補標序」に「報告社長大野堯運、謁我有井進斎、就明凌以棟史記評林、訂正謬誤。其評論未備者、折衷於古今諸家、間以己見補之、命曰補標。進斎者、故徳島藩文学、柴碧海之門人。岩本贅庵高足弟子、於予為同門。」とある如く、補標には陳仁錫・鄧以讃・陳子龍・徐孚遠・鍾惺・呉見思等明末清初諸家の評説を輯め「範案」として私見を交える。

有井進斎、通称範平、阿波徳島の人。天保元（一八三〇）年生。那波鶴峯に師事、算術を小出長十郎に学び、のち岩本贅庵につき経史を究む。寺島学問所素読方、西の丸長久館助教授を経て、明治七年以後教職を以って長崎師範学校・参謀本部編纂課・東京師範学校に歴任。明治二二（一八八九）年五月二二日歿、享年六十。著に「論語論文」「史記評註」「進斎遺稿」がある。

〈内閣文庫蔵〉 二五冊（27938）

空押行成文艶出黄色表紙（二六・八×一八・四糎）。「太政／官

記／録印」（朱方）、「日本／政府／図書」（朱方）の印記あり。
〈斯道文庫蔵〉 二五冊（222ト6 25）
空押卍つなぎ香色布目表紙（二六・六×一八・五糎）。第一六・二〇冊の奥付なし。
〈大阪府立中之島図書館蔵〉 二五冊（332.1 112）
空押卍つなぎ香色布目表紙（二六・八×一八・六糎）。第一六・二〇冊の奥付なし。「和田／蔵書」（朱方）の印記あり。
〈無窮会図書館蔵〉 欠巻六・七 二四冊（真軒1007）
空押亀甲花紋黄色表紙（二六・八×一八・五糎）。第一六・二〇冊の奥付なし。欄外余白及び付簽に朱墨筆で「鑫測云」等と諸書よりの抄録・案語等の書入が周密。朱句点朱引、朱藍圏点書入あり。「田?孝／之印」（白方）、「槃山／蔵書」（朱方）の印記あり。

17 明治一九（一八八六）年東京九春堂印本
題簽は題署程式原刊本に同じくも、目録題簽ともに別版。第五・一〇・二〇・二五冊の末二葉に奥付があり。第一葉表に「明治十六年四月廿日板権免許／同年六月出版（この二行下方に「全二十五冊／定価金拾円」と刻さる）／同十九年十月六日御届再版」とあり以下補標者、出板人（丸谷新八）、発兌所（九春堂）の住所氏名が記され、裏葉より第二葉にかけて、「九春堂出版書目」がある。
〈内閣文庫蔵〉 二五冊（279 39）
空押卍つなぎ香色布目艶出表紙（二六・七×一八・六糎）。

18 明治一五（一八八二）・一六（一八八三）年東京鳳文館刊石川鴻斎等輯校本
空押卍繋黒色布目表紙（二三×一五・三糎）、題簽、「増補評点史記評林 第一（―廿五）冊」と題さる。見返に「明治十五年新刻／増補評点史記評林／東京 鳳文館」と題す。首に「明治壬午之歳小春／巖谷修題」の序を冠し、巻末に「史記評林跋」（「明治十六年歳次癸巳秋八月上澣／鴻斎石英撰并書」、巳は未の誤）がある。巖谷序に続き王世貞叙、以下短長説までを首冊とし、序目内容は上掲八尾板等諸本に同じ。黄洪憲の叙は無く、茅・徐両序末の題署程式は明刊李光縉増補本（5）、寛永一三年刊八尾板初刻本（6）の体式を襲い、目録は引用書目の次、読史総評の前に配さる。第二冊首に補史記があり、本文巻頭、「史記評林巻之一（隔七格）呉興凌稚隆輯校 崑山帰震川評点 温陵李光縉増補 桐城方苞増評／（低一格）五帝本紀第一」と題す（巻四首題には「増補校正」と角書あり）。尾題は「史記評林巻之幾終」。四周単辺（一八・八×一二・四糎、高さ二・八糎の上層を含む）、有界、十三行、行廿四字、注小字双行行卅六字、上層標注行七字、凌李両氏按語低一格行六字。李氏増評頭には墨囲の「増」字を標す。版心白口単黒魚尾、「増補評点史記評林巻幾（小題）（丁付）鳳文館蔵」。句点返点、正文には更に送仮名圏点、まれに傍注付刻。上層の標注の中、帰震川・方苞の評文には墨囲の「補」字を冠し、「帰震川曰」、「方苞曰」等と標示さる。各巻尾題下方に「岡千仞 巖谷脩 石川鴻斎 同校」と。巻末に正誤表二葉を附綴。第五・一〇・一五・二〇・二五冊末に奥付があり、第二五冊末には「明治十五年十二月四日出版御届／明治十六年九月出版」とあり、続けて、輯校人石川鴻斎、出版人山中市兵

衛・前田園、印刷所鳳文館の姓名住所が記さる。他の奥付の程式もほぼ同様ながら、出版年月を第五冊は明治十五年十二月、第一〇冊は同十六年一月、第一五冊は同三月、第二〇冊は同七月とする。見返の刊年をも鑑み、本版は明治一五・一六年の両年に亘って刊行されたものであろう。

首の巌谷脩序に「史記評林、旧刻数板、皆不免魯魚。山中・前田二子、獲一善本、附以帰・方二家評点、公之於世。其益後学、非浅鮮也。二子近開鳳文館、損重貲、鳩良工而通鑒韵府諸書、陸続上梓」と。また鴻斎跋に「頃見武昌張裕釗所刻明帰震川及清方望溪評点史記。其叙事好処（中略）鳳文館主前田士方、将改刻史記評林。余乃迻写張本、併校正旧刊。巌谷誠卿・岡振衣、相与助之。編摩歳月、漸得竣功焉」と。「武昌張裕釗所刻」とは史記一三〇巻例意一巻附方望溪平点史記四巻〔漢司馬遷〕撰明帰〔有光〕評（附）清方〔苞〕評点　清張裕釗等校　清光緒二（一八七六）—四（一八七八）年刊（武昌張氏）のことで、上層の帰・方両評は此本に拠ったものである。

石川鴻斎、字は君華、別に芝山外史、雪泥処士等と号す。三河豊橋の人。後横浜に出で清客と交り、欽差大使何如璋等と往来す。文章家、南画家として知らる。大正七年（一九一八）九月十三日病歿、享年八十六歳。

〈国立国会図書館蔵〉半二五冊（222.03 Si229Rs Rh）

「亀田／蔵書」（朱方）、「本亀田／蔵書印」（朱長方）の印記あり。

〈慶應義塾図書館蔵〉半二五冊（中文・奥野 I-4 6 25）

第一五冊の奥付は第一〇冊の奥付を誤綴。「剴／南」（朱方）の印記あり。

〈東北大学附属図書館蔵〉半二五冊（狩 3 26601 25）狩野文庫

首に石川鴻斎跋を冠し、巌谷修序を欠く。鴻斎跋首題下に「跋」字なく「史記評林」とのみ題し、末の撰書年干支を「癸未」と改正。巻末の正誤表無し。第五・一〇・十五・二〇冊の奥付は無く、末冊の奥付は前掲両儲蔵本とは異板で、出版人山中市兵衛の姓名住所を欠き、印刷所を発兌所とし、東京鳳文館本舗、大坂鳳文館支舗を記し、此奥付裏葉より後表紙裏にかけて、東京銀座博聞本社より、羽前国山形荒井太郎に至る二十七の売捌書舗が列記さる。「岡村寛」（朱小円）、「岡寛／印」（白方）、「仙／栗」（朱方）、「狩野博士集書」（朱長方）の印記あり。

明治期刊行の評林本史記には他に、東京同盟出版書房本（19）及び富山房漢文大系本（20）があるが、洋装活版本である故、解題は略す。

○

21百五十名家評註史記　民国一二（一九二三）年上海文瑞楼刊石印本　中二〇冊二帙

薄茶色表紙（二〇×一三・一糎）、題簽「百五十家評註史記上海文瑞楼印行」と題す。「百五十家／評註史記／　司鳳章書」と題せる書扉を有し、その裏に「癸亥秋上海／文瑞楼石印」なる刊記が有る。首に王世貞・茅坤・徐中行の三序を冠し、以下、「史記索隠序」・同後序・「補史記序」・「史記正義序」・同集解叙・同

正義論例・同列国分野・譜系図地理図七葉・凡例・姓氏・読史総評・目録・「百五十名家評註史記補」と続き以上を第一冊に収める。内容順次とも史記評林諸本にほぼ同じくも、短長説二巻を欠き、「史記評林」と題すべきところを全て「百五十名家評註史記」とする。王世貞叙に「百五十名家評註史記叙」、凡例に「百五十名家評註史記凡例」と題すが如くである。本文巻頭「百五十名家評註史記巻之一／（低二格）漢太史令龍門司馬遷著／（低二格）五帝本紀第一」と題す。四周双辺（一五・六×一〇・九糎）、有界、十六行行卅二字、注小字双行卅二字、眉上標注行七字、或は六字。正文に句点を付す。版心小黒口単黒魚尾、上象鼻右に「百五十名家評註史記」、魚尾下に巻次、小題丁付がある。尾題は各冊末に当る巻にのみ、首題と同程式で題され巻数下に「終」字があるが、第九、十一、十四、十六、十九冊末にはなく、大半は尾題を欠き、各巻末に直接し次巻の首題があり、巻首毎に改葉はしない。第一〇・二〇両冊末に、上海文瑞楼書籍広告各一葉を附す。

本版は、李光縉増補史記評林の改題本で、巻頭には凌稚隆・李光縉の輯校・増補者名の題署はないが、眉上標注は明らかに両人所輯の評注及び按語であり、首の凡例末の両自序は存している。当時通行せる俗本であろうが現今架蔵する儲蔵機関を聞かず、本項は池田英雄氏御所蔵の本に依って記した。

おわりに

史記評林は明万暦初年に刊成してより、中国本土に於いては、万暦中に両度、翻刻或は増補覆刻されたに止まり、各本数次の遞修を経てはいるものの、明末より清季に至るまで絶えて重刊されたことがない。本書の正文・三注について言えば、輯校者自ら凡例に銘記している如く金台汪諒刊本をもとに宋本及び其の他の善本を参校したのであって、校訂にも充分意を用いており、テキストとしてみても明代に刊刻された諸本に比して勝るとも劣るものではない。此事は水沢博士も諸本との校勘の結果、裏付られたことである。にもかかわらず、刪略誤脱の極めて多い南監本（嘉靖九年初刊・万暦三年再刊・同二四年再々刊）の方が、むしろ通行した。また、明末に及び、鍾人傑刊本、黄長吉編刊本、陳子龍・徐孚遠撰の史記測義、葛鼎・金蟠編の史記彙評等、評林の体裁に倣った諸本が出、むやみに批点を加え、評林所輯の評論を抄録し、正文をすら恣意に節略し、通読に簡易なる俗書が潑出流行したことが本書の通行を阻むことになった一因とも考えられる。清に入ってからは考証学の興隆に伴い、評論の蒐輯を趣意とせる本書は、読書人の間では俗書と見做され、殆ど無視されて顧られることは無かった。纔に銭泰吉、周中孚等が校勘の比較的優れていることに注目しているに過ぎない。(注24)

本書は寧ろ日本に於て通行した。先行せるテキストとして慶長古活字版があるが、寛永一三年、八尾が初めて整版に上すに当って、古活字版を捨てて明版史記評林を採った経緯は残念ながら詳かにはできないが、以後、我国に於ける倭版史記は殆ど評林本に限られることとなり、幕末までに計五度、明治期に十

度の覆刻乃至翻刻をみたことは、縷述して来た如くである。江戸期にやや少くも感じられるが、一つには八尾紅屋両版の支配人が重版・類版の防止に努めた結果と考えられる。寛政初年に大坂書林奈良屋長兵衛等が得た「史記評林論文入及び点付」の願株に対して、八尾板支配人敦賀屋九兵衛等が差構え、遂に願下げとなった一件（裁配帳二番史記出入一件）等は此事を如実に示していよう。

江戸期の読書人は史記といえば、一部の漢学者は明南監本或は汲古閣本等の唐本をも手にしたであろうが、一般には和刻評林本を繙いたに相違ない。近藤正斎が「此際古本少トセズ然ルニ今行本徒ニ評林本ヲ加点翻刻スルノミ世ノ安者何ゾ古ニ稽ヘズシテ徒ニ簡捷ニ趨ルヤ澆漓ノ弊慨嘆スベシ」（正斎書籍考巻三）との嘆きは書誌学者としての至言であろうが返って本書の盛行の有様を語るものである。

一方、太宰春台が「書史記評林後」（春台先生紫芝園後稿巻之十）[注25]に於て説く如く、評注を蛇足無用とする見地があり、江戸後期に入ると三注をも削り去った次の二本が刊行されている。

史記一三〇巻史記補一巻　漢司馬遷撰　服〔部〕元寛等校
　寛政四（一七九二）年刊（磐船郡　村上藩）　木活
史記（外題史記正文）一三〇巻史記補一巻　漢司馬遷撰
　多賀漸校点　寛政五（一七九三）年刊（詳龍閣真本
　大坂　柳原喜兵衛等）

また、小田原藩は清版の覆刻により次の一本を出している。

史記論文一三〇巻　漢司馬遷撰　清呉見思評点　呉興祚校
　文政九（一八二六）年刊（小田原藩　天游園蔵板）

しかしながら、此等とて到底史記評林の盛行を阻むには及ばず、明治期の通行本は大半が評林本であった。

伊藤東涯・東所・東峯、中井履軒、三村崑山、皆川淇園、松崎慊堂、猪飼敬所等の自筆書入本が現存することからみても江戸期の学者がいかによく本書を用いたかが推知せらるる。或は正斎が歎くが如く簡捷に趨るものであったか知れない。其の功罪はそれとして、本書の江戸漢学に及ぼせる影響は少しとしないであろう。

本稿は阿部隆一を代表者とする「国書並に漢籍総目録の編纂」のための調査結果の一端であり、トヨタ財団研究助成金に依って成ったものである。此に銘記して謝意を表する。また、本調査に当って閲覧・見本複写等種々御高配を賜った尊経閣文庫をはじめとする公私の図書館・文庫各位に対し、心から厚く御礼申上げる。更に、池田英雄氏には貴重なる御蔵書を快く閲覧させて頂き調査遂行上多大の便宜を得た。心から深く感謝申上げる。

注

1　史記題評一三〇巻首目一巻　漢司馬遷撰　劉宋裴駰集解
　唐司馬貞索隠　張守節正義　明楊慎等標注　明楊慎・李元陽
　輯　高世魁校　明嘉靖一六（一五三七）年刊（福州知府胡有

恒・胡瑞敦）　斯道文庫蔵本大七〇冊（欠首三巻、有補鈔）、内閣文庫蔵本大六〇冊（欠巻一・二七、有補鈔）がある。

2　荊川先生精選批点史記（目録題）不分巻　漢司馬遷撰　明唐順之選評　明〔嘉靖〕刊　内閣文庫蔵大四冊

同　一二巻　〔明嘉靖万暦間〕刊　東洋文庫蔵大一二冊

3　史記鈔九一巻首目一巻　明茅坤評並輯　明泰昌元（一六二〇）年序刊（呉興閔振業）　朱墨套印　内閣文庫蔵大二四冊、同蔵二四冊（欠巻三五）

4　史記〔輯評〕二四巻　漢司馬遷撰　明鄧以讚輯評　陳祖苞補　朱日燦校　明万暦四六（一六一八）年序刊　内閣文庫蔵大二四冊

5　史記奇鈔一四巻首一巻附報任少卿書　漢司馬遷撰　明陳仁錫彙纂　鍾惺編定　劉肇慶校　〔明末〕刊（天絵閣）　内閣文庫蔵大一三冊

6　孫月峰先生批評史記一三〇巻首目一巻附褚先生附余一巻　漢司馬遷撰　明孫〔鉞〕評　馮元仲編　馮眉等校　明崇禎九（一六三六）年序刊　内閣文庫蔵大一四冊

7　史記彙評（序題）一三〇巻輯注一三〇巻首目一巻　漢司馬遷撰　明葛鼎・金蟠編　明崇禎一〇（一六三七）年序刊（劉仲白等）　内閣文庫蔵大一六冊

8　梅太史訂選史記神駒四巻附報任少卿書　漢司馬遷撰　明梅之煥編　孫承宗校　明万暦三四（一六〇六）年刊（三建喬木山房）　内閣文庫蔵大四冊

9　新刻霍林湯先生評選史記玉壺氷八巻附報任少卿書　明湯〔賓尹〕編　〔明万暦〕刊（宝善堂）　内閣文庫蔵半四冊

10　史記綜芬評林三巻附報任少卿書　〔漢司馬遷〕撰　明焦竑選輯　李廷機等注　李光縉彙評　明万暦刊（建興書軒魏畏所）　内閣文庫蔵大三冊、蓬在文庫蔵大三冊

11　新鍥鄭孩如先生精選史記旁訓便読八巻　漢司馬遷撰　明鄭維嶽選並旁訓　〔明末〕刊（温陵楊九経）　内閣文庫蔵大四冊

12　史記統五巻附報任安書　〔漢司馬遷〕撰　明王思任・邵元禎・童養正等編　〔明末〕刊　池田英雄氏蔵大二冊

13　明神宗顕皇帝実録巻一六一、万暦一三年五月丙戌の条に「以翰林院編修黄洪憲・兵部主事蔡文範為福建考試官」とみえる。

14　京都書林行事上組済帳標目（宗政五十緒・朝倉治彦編　京都書林仲間記録五　東京　ゆまに書房　書誌書目シリーズ五　昭和五二年一二月）の天明九年酉正月ヨリ寛政元年五月迄の項に「林権兵衛銭屋庄兵衛所持史記八尾之古板一件之事」と見える。

15　京江戸書状之控（大坂本屋仲間記録第十巻）の次の記録。

永代売渡申板木之事

一　史記評林　八尾板　焼株　四軒之壱軒前
一　同　古板　同無点　焼株
一　同　鐘伯敬　同点付　同
一　同　觸
一　同　助字法

右之通焼株式、浅井伊予助殿所持ニ相違無御座候所、此度我等以世話其許殿へ代銀七貫五百目相定、永代売渡申候所実正也、則代銀慥ニ受取申候、然ル上は右株式ニ付、外方ゟ違乱妨申者無御座候、万一故障有之候ハヽ、何時ニ而も我等罷出埒明可申候、為後日売上一札依而如件

慶応元年丑九月

京都 丸屋善兵衛

秋田屋太右衛門殿

16 管見に入れる史記考の諸所儲蔵本は次の如し。

陳明卿〔史記考〕 明陳仁錫撰 闕名者校点 延宝二（一六七四）年刊（京 八尾甚四郎友春）

本文巻頭、「陳明卿五帝本紀考」と題す。四周単辺（一九×一六・二糎）、高さ三・九糎の上層あり。無界十二行、行十九字、考文大字低一格十八字。版心大黒口単黒魚尾、「寛文壬子年刊（一部陰刻） 史記巻之幾（小題）（丁付）八尾友春（陰刻）」。縦点返点送仮名附刻。上層に行四字の校語が刻さる（周本紀考第一葉表の一個所のみ）。本文末行に直接し、「延宝二甲寅暦仲夏吉辰／洛陽寺町通本能寺前 八尾甚四郎友春重刊」と刊記あり。

〈神宮文庫蔵〉 二冊（五乙二い1816）。空押菊花紋緑色表紙（二六・九×一八・九糎）、題簽欠落。

〈慶應義塾図書館蔵〉 一冊（71 16 1）。改装香色表紙（二六・八×一九・三糎）、「史記考」と墨書さる。巻末の刊記は剜去さる。

又 享保二（一七一七）年印（京 金屋半右衛門）

題簽を有し「陳明卿史記考 仁（義礼智信）」と題し、上方区画に圏で囲み、「本記」、「表」、「世家」、「列伝」と標記さる。本文末の原刊記を削り、「享保弐丁酉霜月吉日／京堀川通本国寺前／ 金屋半右衛門求版」と改刻。

〈国立国会図書館蔵〉 五冊合三冊（166 147）。香色表紙（二六・二×一八・九糎）。

〈無窮会蔵〉 五冊（沼平1011）。濃縹色表紙（二六×一八・七糎）。

〈東京大学総合図書館蔵〉 五冊（G30 422）。縹色表紙（二六×一八・七糎）。「南葵／文庫」（朱方）、「島田氏隻／桂楼収蔵」（朱長方）の印記あり。

〈大阪府立中之島図書館蔵〉 五冊（332 20①）。香色艶出表紙（二七・二×一八・八糎）。

〈同蔵〉 五冊（332 20②）。濃縹色表紙（二六・九×一八・八糎）。

又 後印（大坂 定栄堂吉文字屋市兵衛）

各冊首尾に大坂定栄堂吉文字屋市兵衛の蔵版目録を附す。題簽同前。出勤帳三番（大坂本屋仲間記録第一巻）安永四年五月の行司申送り之覚の一件として、「吉文し屋市兵衛殿ヨリ、史記考之口上書出申候、可然様御評議可被成候事」とみえ、当時すでに、吉文字屋の持株となっていたことがわかる。

〈刈谷市立刈谷図書館蔵〉 五冊（3375）。香色表紙（二六・六×一八・九糎）。眉上に朱青の標注書入あり。

〈内閣文庫蔵〉 五冊（279 46）。香色表紙（二六・六×一九・七糎）。欄上にまま墨筆の校字書入あり。「居畎畝丘／中以楽／

□□道」（白方）、「源印／乗衡」（白方）、「蕉／隠」（朱方）、「述斎衡／新収記」（朱長方）、「林氏／蔵書」（朱方）、「昌平坂／学問所」（墨長方）、「大学／蔵書」（朱方）、「浅草文庫」（朱長方）、「日本／政府／図書」（朱方）、「内閣／文庫」（朱方）の印記あり。

〈国立国会図書館蔵〉 五冊（222.03-Si229T5t）。香色表紙（二六・七×一九・二糎）、原題簽無く書題簽、「陳明卿史記考」と墨書。「内池家蔵」（朱長方）の印記あり。

〈大東急記念文庫蔵〉 五冊（101 13）。香色表紙（二五・七×一八・一糎）。巻末の刊記を削去。「高氏／収蔵／図書」（朱方）の印記あり。

〈東北大学附属図書館蔵〉 五冊（狩3 5958 5） 狩野文庫。空押卍つなぎ茶色覆表紙（二五・五×一八・三糎）、中央に「東北帝国／大学図書」と空押さる。原表紙は茶色、原題簽同前。「下埜国／渡部氏／蔵書印」（朱長方）、「荒井泰治氏ノ寄附金ヲ／以テ購入セル文学博士／狩野亨吉氏旧蔵書」（朱長方）の印記。

17 裁配帳第二番史記一件出入（大坂本屋仲間記録記第九巻）

に

一 史記評林無点 并古板点付株　板元　奈良屋長兵衛 柏原屋清右衛門 柏原屋与左衛門 増田屋源兵衛

寛政元酉五月求板

京小川多左衛門・林伊兵衛両人ゟ、京行司割印有証文添、当地奈良屋長兵衛へ求板

とある。

18 同じく

永代売渡申板木之事

一 史記評林無点丸株　但シ板木半分焼失 半分板木三百三拾弐枚有

一 同 点付株　八尾元板

一 同 正文　十軒之一軒前、尤白板ニ而取筈

一 同 觸　十軒之壱間前（ママ）

一 同 助字法　十軒之二軒前

一 同 論文願株　四歩半

右、京都小川多左衛門殿・林伊兵衛殿両人ゟ、元証文相添買請、銘〻共方ニ所持致罷在候処、其元御支配之八尾板史記評林へ差構候ニ付、此度及出入候処、御行司中之御取扱を以、代銀拾六貫五百目并ニ樽代金五拾両ニ相定永代売渡、則代銀慥請取候処実正也、然ル上ハ、右史記評林之儀ニ付、外ゟ違乱妨申者無御座候、為後日売渡一札仍而如件

寛政四子年正月

奈良屋長兵衛印
柏原屋清右衛門印
柏原屋与左衛門印
増田屋源兵衛印

敦賀屋九兵衛殿
井筒屋伝兵衛殿

永代売渡申板木之事

一　史記評林無点半株　残り板木百六拾六枚
一　同　点付株　八尾元板半株
一　同　正文　廿軒之壱軒、白板ニ而取筈
一　同　觸　廿軒之壱軒前
一　同　助字法　十前之一軒前
一　同　論文願株　弐歩弐厘五毛

右之板木并焼株願株、奈良屋長兵衛殿ゟ買請所持いたし候処、此度代銀五貫目ニ相定永代売渡、則代銀慥請取申所実正也、然ル上ハ、右板木之儀ニ付外ゟ違乱妨申者無御座候、為後日売渡一札仍而如件

寛政四子年正月

八尾板支配人
敦賀屋九兵衛印
井筒屋伝兵衛印

紅屋板元中

とみえる。

19　同一番（同）に

覚

一史記評林八尾板丸板株之内、半株私共買請所持仕罷有候、以来右之末書等之開板御願物御座候節者、御仲間之内敦賀屋九兵衛・河内屋嘉市方江右之写本御廻し可被下候、此段御断奉申上候、以上」

寛政元年酉九月十九日

雑喉屋三郎兵衛㊞

本屋仲間
御行司中様

板屋孫兵衛㊞

と、又、同二番史記一件出入に

一　史記評林　八尾板　板元

半株素人板支配人　河内屋嘉市
弐歩半支配人　井筒屋伝兵衛
弐歩半　敦賀屋九兵衛

寛政元酉九月求板
京都ゟ求板

右敦賀屋へ之売上証文斗ハ無点古株ニ而、再板有之節ハ八尾板へ応対有筈といふ、京都行司割印有

とみえる。

20　出勤帳五十四番（大坂本屋仲間記録第五巻）嘉永五年閏二月の条に

一敦九ゟ、手代彦七義別家加入之義、同人請人ヲ以願出聞済遣し出銀請取、夫々印形取置候事

とみえる。

21　同三十七番文政九年九月の条に

一秋田屋太右衛門下人清助、年季無滞相勤候ニ付、秋田屋新兵衛ト改名致、此度別家加入願出候、出銀受取帳面印形取相済候事

又三十八番文政十年四月に

一秋田屋新兵衛、堺屋新兵衛ト家号改メ願出候ニ付、出銀請取諸帳紙致シ遣し候事、但し秋太印形も取有之

とみえる。

22　史記伝本攷　岡本況斎（保孝）撰〔明治〕写　況斎叢書二十四之内　国立国会図書館蔵に依る。

23　出勤帳二十六番（大坂本屋仲間記録第二巻）文化八年十月廿日に

一史記紅屋板、糸屋市兵衛所持之板木、酢屋六左衛門買取候ニ付、板木支配人河内屋嘉助ゟ買板部銀受取、夫〻帳合致置候事

とある。

24　甘泉郷人稿巻五校史記雑識の冒頭に於て「史記明刻本集解索隠正義皆備者、以震沢王氏・莆田柯氏本為善。評林本（呉興凌稚隆刻）蔵書家不以為重。今以乾隆四年殿本校勘、乃知勝明監本多矣。凡例言以宋本与汪本（当即柯本）詳対、非虚語也」と言う。

又、周氏は鄭堂読書記巻一五に本書を著録し、「其所采輯以多為貴、不免瑕多于瑜。其書之可取者、転在正文及注」として、「史記評林凡例」の校勘に関する一項を引き「余因取柯校本、互相核対、卻無刊落之処、而柯本之脱文誤字、此本俱添入改正。然則就正文及注而論、較之柯本、殊為勝之、而其輯評之得当与否、儘可存而不論」と述べている。

25　春台の所論は左の如し。

凌以棟著史記評林、旧註之外、増附索隠正義則猶不悪。唯索隠述賛極無味。其評林則為無用。其載三皇本紀、則為馬史之蛇足。其載弇州擬短長説、李滄溟擬秦王辞、則為戯謔。此三者、皆無益於史学、而徒煩読者。要之凌氏之為斯也、其用者厘十一二耳、余去之可也。李光縉何為者而増補之、吾悲其意云。（中略）予嘗得史漢評林而読之。見其譏評之無用者、悉塗抹之、悪其労目也。嗟乎、王元美・徐子与好古之士、而作序以揚扢凌氏之挙、抑何意哉。予嘗怪焉。

追記

1　近時公刊された、北京師範大学図書館中文古籍書目（同館編並出版　一九八三年、一九六二年刊本の影印）は「同治一三年（一八七四）長沙魏氏養翮書屋刻本」を著録するが、本邦儲蔵する所を聞かず未見。

2　右同目には更に、「光緒二七年（一九〇一）上海天章書局石印　一二冊」が著録さるるも未見にして委細未詳。

3　入稿後、出張調査の機を得たので此に補記する

〈佐賀県立図書館蔵〉　欠首―巻三、五六―七七　二四冊（鍋993.2 52 222.01）

茶褐色表紙（二七×一七・六糎）、題簽無く、「史記　幾」と墨書さる。本文句点のみを残し返点送仮名旁注等を削除。巻一九第一～四葉、巻四三第九～一二葉等他葉に較べ印面清麗なる所あり、或は補刻葉を交えるか。一部に青句点朱引朱声点を附し、上層或は欄上に青墨朱筆の校語等の書入あり。「弘道／館蔵／書印」（朱方）、「亀／峯?」（白方）、「鍋島／家蔵」（朱方）の印記。

4　神宮文庫蔵本の後に次の一帙を追補する。

〈市立飯田図書館蔵〉　二五冊（310）

薄茶色表紙（二六・八×一九・二糎）、題簽角書は「新版考

正」とあり、下方の巻次数は無い。目録外題が墨書さる。一部に朱引句点圏点が附され、欄上に朱墨の校語等の書入あり。「下伊那／郡飯田／図書館」（朱方）の印記。

5　都立中央図書館蔵本の前に次の一帙を追補する。

〈太宰府天満宮蔵〉五〇冊（天満宮283）

香色表紙（二七・三×一九・五糎）、題簽殆ど剝落し書外題であるが、内に「新刻校正」と角書、書名下に「卅四之卅七」等と巻次数のある原題簽を僅かに存す。第一八冊表紙に「天満宮（太宰府）／御文庫」、見返に「西府／御文庫用」と墨書さる。「太宰府神／社文庫印」（朱長方）、「西府文庫蔵書」（朱長円）の印記あり。

6　神宮文庫蔵本の後に次の一帙を追補す。

〈太宰府天満宮蔵〉欠短長説・読史総評二四冊（天満宮282・小鳥居家145）

空押蓮花紋濃縹色布目表紙（二七・五×一八・二糎）、題簽縹色、「新版考正」と角書あり。但、大半が剝落。ほぼ毎冊尾に「執行坊蔵本（或は書）」と墨書あり、首冊尾に「寛政六寅年六月吉旦　執行坊信誠調」と署さる。

7　内閣文庫蔵本の後に次の一帙を追補する。

〈市立飯田図書館蔵〉欠巻二―四、一〇七―一二五　二一冊（39）

茶色布目表紙（二七・六×一九・三糎）、書題簽「史記評林幾」。一部に朱引圏点、青筆句点が附され、まれに行間に墨筆の校語書入あり。「呉観／艸蔵」（朱方）、「飯田城／主堀氏書庫」（朱方）、「下伊那／郡飯田／図書館」（朱方）の印記。

8　豊橋市立図書館蔵本の後に次の一帙を補記する。

〈市立飯田図書館蔵〉二五冊（311）

香色表紙（二七・四×一八・六糎）、目録外題が墨書さる。一部に朱句点圏点を附され、訓点訂正、校字等の書入がなさる。「呉観／艸蔵」（朱方）、「下伊那／郡飯田／図書館」（朱方）の印記あり。

9　東北大学附属図書館蔵本の後に次の一帙を補記する。

〈市立飯田図書館蔵〉五〇冊（312）

空押唐草黄色布目表紙（二六・七×一八・三糎）。「飯田学校／図書之記」（朱長方）、「下伊那／郡飯田／図書館」（朱方）の印記あり。